

RI*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJ00020
調査タイトル	日本女子大学家政学部の卒業生実態調査
論文／雑誌名	1「Ⅲ日本女子大学家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像」(「日本女子大学家政学部の100年-どのような卒業生を送り出したか-」)『総合研究所紀要』第5号
著者	代表江澤郁子(真橋美智子・塚原典子・沖田富美子・佐々井啓・館岡孝・大野静枝・宮崎礼子・江澤郁子)
掲載ページ	pp.26.-41.
発行年	2002.11
出版社	日本女子大学総合研究所

目 次

- 日本女子大学家政学部の100年——どのような卒業生を送り出したか——
A Century of the Department of Home Economics in Japan Women's University
—The Destiny of Graduates—
..... 研究代表者 江 澤 郁 子 ... 1
- 日本女子大学式統語および意味の理解テストJ.COSSを用いた日本語の
言語獲得過程の横断的研究
Cross-sectional Studies on Acquisition Process in Japanese Analyzed by J.COSS
(JWU Japanese test for Comprehension of Syntax & Semantics)
..... 研究代表者 小 山 高 正 ... 53
- 日本の社会福祉発達と本学社会事業学部創設の意義に関する研究
Role of the Department of Social Welfare, Japan Women's University
in historical development of social welfare in Japan
..... 研究代表者 2000年度 田 端 光 美
2001年度 牧野田 恵美子 ... 91
- 成瀬仁蔵の女子教育
——初期日本女子大学校卒業生のアメリカ留学と国際交流にみる
Naruse Jinzo's Education for Women: Early JWU Alumnae's Studying Abroad
in the U. S. and Their Promotion of International Understanding
..... 研究代表者 島 田 法 子 ... 151

日本女子大学家政学部の100年
——どのような卒業生を送り出したか——

江 澤 郁 子 (研究代表者)

真 橋 美智子

沖 田 富美子

佐々井 啓

塚 原 典 子

一番ヶ瀬 康子

館 岡 孝

大 野 静 枝

小 川 信 子

宮 崎 礼 子

赤 塚 朋 子

目 次

はじめに	江 澤 郁 子
I 創立者成瀬仁蔵の家政学部構想	一番ヶ瀬 康子
II 家政学部の教育内容およびその変遷	
1 旧制	館岡 孝, 赤塚朋子
2 新制	宮崎礼子, 赤塚朋子
3 通信教育課程	赤 塚 朋 子
III 日本女子大学家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像	
1 旧制	真 橋 美智子
2 新制	
1) 調査の内容と調査方法	塚 原 典 子
2) 家政学部卒業生に対する調査から	沖 田 富美子
3) 通信教育課程卒業生に対する調査から	真 橋 美智子
4) 家政学研究科修士に対する調査から	佐々井 啓
IV 家政学部卒業生の社会的展開	
1 学位取得者に関する調査	館 岡 孝
2 外国人留学生について	大 野 静 枝
3 旧制・新制・通信教育——卒業後の社会的活動領域——	宮 崎 礼 子
おわりに	江 澤 郁 子

Ⅲ 日本女子大学家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像

日本女子大学の建学の精神とその使命が、家政学部の教育と研究にどのように反映されてきたのかについては、この100年の歴史において、どのような卒業生を社会に送り出してきたのかを検証することで、明らかにすることが可能となる。

特に1901年の創立時から設置された家政学部の卒業生の動向については、大正期の本学卒業生に対する調査（旧制10回生から25回を対象に1970年実施）¹⁾、昭和前期の本学卒業生に対する調査（旧制26回生から43回を対象に1982年実施）²⁾、女子大学卒業生の生活・意見調査（旧制44回生から48回、新制1回生から15回を対象に1967年実施）³⁾、女子大学卒業生の就業調査（新制1回生から16回を対象に1966年実施）³⁾などが実施され、女子の高等教育を被教育者の側がどのような受けとめかたをしていたかを、明らかにしようとの試みがなされ、報告されてきている。

そこでそれらの流れをとおしてとらえるべく、新制大学以降の卒業生を対象に（家政学部の学部及び通信教育課程の卒業生、家政学研究科の大学院修了生）、調査をおこなうこととした。

1. 旧制

日本女子大学女子教育研究所が実施した「大正期の本学卒業生に対する調査」（1970年）と「昭和前期の本学卒業生に対する調査」（1982年）を通して、旧制の日本女子大学校家政学部卒業生の家政学部像について探ることにした。学部像は入学前、本校在学時、卒業時、卒業後の各時期毎に検討したが、字数の都合上本稿ではその結果をごく簡単に述べる。詳しくは別に報告する。なお本稿でいう家政学部には、大正期の家政学部、教育学部家政科（師範家政学部）、社会事業学部、昭和前期では家政学部（家政学部第一類）、師範家政学部（家政学部第二類）、社会事業学部（家政学部第三類）を含む。

調査からみる限り、その家政学部像は専攻学部毎にかなり異なる。「家政」では女学校だけでもの足りずに入学し、学部では広い視野や教養、同時に実践的な学びを身につけ、卒業後家庭生活に生かす者が多くみられる。また「師範家政」では入学時に家事科教員免許の取得希望が多く、さらには経済的自立を目指す者も比較的多く、学部で取得した免許や専門が、卒業後の職業生活（主に教員）に生かされている。一方「社会事業」では将来社会の役に立ちたい、専門の勉強をしたいと希望して入学し、特色ある教育を受け、卒業後職業生活や社会活動に生かす者が多い。

その一方で、家政学部全体で本校共通の教育、学部の教育が精神教育として、あるいは人間形成に役立ったと評価する者が極めて多く、卒業生の生きる支えとなったり、卒業後の生活に様々な形で生かされている。

なお昭和前期の後期は戦時下であり、学部の特徴を越えた時代の影響がみられる。

2. 新制

1) 調査の内容と調査方法

まず学部の卒業生を対象に、家政学部（＝学科）を選択した動機および家政学部での教育の卒

業後の生活に対する影響、卒業後の就職の状況、家政学部での教育に対する評価などについて、また通信教育課程卒業生に対しても同様に、通信教育課程を選択した理由、学科を選択した動機、通信教育課程の教育の卒業後の生活への影響あるいは評価などについて、さらに大学院修了生に対しては、大学院への進学動機、修了後の進路、社会活動の動向、大学院在学中に受けた教育の評価などから構成されるアンケート調査をおこなった。

調査対象とした家政学部の、特に新制入学以降の卒業生は、現在（2001年3月現在）49,096名となっているが、新制1回生から新制40回生までの卒業生は、16,980名である。これら卒業生から、各学科、各回生とも1/4を無作為抽出し4,245名に、また通信教育課程卒業生に対しては、1953年3月（1回生）から1992年3月（40回生）までの卒業生の中から1/4の抽出による1,271名に、さらに大学院修了生に対しては、1963年3月から2000年3月の38回生までの808名中、住所が確認できた703名に、調査表を配布、郵送による指定期日までに回収する方法とした。調査時期は学部卒業生は、1999年9月から10月、通信教育課程卒業生は2000年5月から7月で、大学院修了生は2000年5月から8月である。回収数は学部は1,825名、通信教育課程は537名、大学院は508名となり、回収率はそれぞれ42.9%、42.3%、72.3%である（表Ⅲ-1参照）。

なお本稿では、調査結果から得られた日本女子大学家政学部の卒業生および家政学研究科の修了生をとおして、入学前、大学時での、卒業時の、卒業後の家政学部像について、特に各学科、各専攻別の分析結果をもとに報告する。

表Ⅲ-1 調査対象 配布数・回収数 (人・%)

		配布数	回収数	%	
家政学部	児童	655	286	43.7	
	食物	678	375	55.3	
	社会福祉	95	33	34.7	
	理 I	物理	808	120	34.4
		数学		64	
		化学		94	
	理Ⅱ	370	142	38.3	
	住居	649	249	38.4	
	被服	587	275	46.8	
	家政経済	403	185	45.9	
全 体	4245	1825*	42.9		
通信教育課程	児童	511	199	38.9	
	食物	464	225	48.5	
	生活芸術	296	113	38.2	
	全 体	1271	537	42.3	
家政学研究科	児童学	703	106	72.3	
	食物・栄養学		256		
	住居学		88		
	被服学		45		
	生活経済		13		

* 学科名不明の2名を含む

2) 家政学部卒業生に対する調査から

(1) 調査対象者の概要

調査対象とした卒業生は、前述したように新制1回生から40回生にまでわたっているため、年齢は現在30代前半のものから70代前半にひろがっている。調査対象者の9割のものが既婚者である。家族については、既婚者の場合4人家族が一番多いが、2人家族も多く、平均家族人数は3.69人である。現在職業をもっているものは42.3%（卒業以降の就業経験ありとする回答者は1,797名であるが、ずっと職業についている368人とついていなかった時期があるが、現在は就業している391人を合わせている）になり、半数弱のものが、現在職業についていると言える。居住地は関東近県とするものが多いが、南は福岡県から北は北海道まで全国的に散らばっている。

(2) 入学前の学生の家政学部像

入学前の家政学部像としては、入学の際の志望動機すなわち各学科選択の動機からとらえることとした。その結果の一部を表Ⅲ-2に示す。

全体的には「その学科が自分の適性に合っていると思った」とするものが一番多く（55.2%）、
表Ⅲ-2 学科選択の動機 (件/%)

学科 動機の内容	児童 (286)	食物 (375)	理 I			理Ⅱ (142)	住居 (249)	被服 (275)	家政 経済 (185)	社会 福祉 (33)
			化学 (94)	数学 (120)	物理 (64)					
専門の勉強をしたかった	138 48.3	158 42.1	43 45.7	56 46.7	28 43.8	90 63.4	159 63.9	98 35.6	44 23.8	8 24.2
家政学部発祥の大学だから	20 7.6	50 13.3	3 3.2	1 0.8		6 4.2	3 1.2	44 16.0	20 10.8	2 6.1
就職に有利だから	3 1.0	1 0.3	13 13.8	19 15.8	8 12.5	4 2.8	8 3.2	6 2.2	9 4.9	
卒業後経済的に自立したい	22 7.7	28 7.5	14 14.9	14 11.7	8 12.5	12 8.5	48 19.3	26 9.5	32 17.3	7 21.2
将来社会の役に立ちたいと思った	44 15.4	34 9.1	12 12.8	7 5.8	6 9.4	12 8.5	34 13.7	17 6.2	27 14.6	19 57.6
両親にすすめられた	36 12.6	88 23.5	17 18.1	7 5.8	7 10.9	19 13.4	31 12.4	53 19.3	25 13.5	6 18.2
資格・免許をとりたと思った	136 47.6	181 48.3	12 12.8	34 28.3	7 10.9	25 17.6	65 26.1	46 16.7	25 13.5	3 9.1
親戚・知人や先輩が本学で学んだ	28 9.8	50 13.3	10 10.6	12 10.0	5 7.8	12 8.5	16 6.4	38 13.8	15 8.1	7 21.2
教師にすすめられた	5 1.7	16 4.3	3 3.2	7 5.8	1 1.6	9 6.3	8 3.2	13 4.7	6 3.2	1 3.0
女性としての将来に役立ちそう	76 26.6	135 36.0	7 7.4	7 5.8		9 6.3	46 18.5	76 27.6	55 29.7	
その学科が自分の適性に合っている	176 61.5	165 44.0	62 66.0	79 65.8	45 70.3	83 58.5	137 55.0	167 60.7	82 44.3	11 33.3
日本女子大とにかく入りたかった	1 0.3	3 0.8	3 3.2			6 4.2		21 7.6	31 16.8	1 3.0

半数強のものが優先的な動機として選択している。次に多いのが「専門の勉強をしたかった」とするもので、半数弱のものが選択している（45.1％）。

学科別では、前者の「自分の適性にあっている」と言う意見を選択したものが一番多い学科は、物理、化学、数学の理Ⅰと被服、児童学科（以下、学科と言う表現を省略する）である（60％以上）。理Ⅱ生物と住居もその割合は多いが（50％以上）、この学科の場合は、「専門の勉強をしたかった」とする動機をあげるものの方が多くなっている（60％以上）。食物の場合は、前述の2つの動機をあげるものも多いが、「資格・免許をとりたと思った」とするものの方が（48.3％）、わずかではあるが多くなっている。この動機については、児童においても同様である。なお社会福祉の場合は、「将来社会の役に立ちたと思った」とする動機を選択したものが約6割弱いること、家政経済の場合は、食物とほぼ同じ傾向にあるが、「卒業後経済的に自立したかった」「どの学科でもいいから日本女子大に入りたかった」などの動機をあげるものも多いのが、特徴的である。以上のことから、学科により多少その動機は異なっているものの、ある程度家政学部に専門性を期待しつつ、自分の適性にあった学問ができるのが家政学部である。また家政学部で学ぶことにより、資格・免許がとれ、将来社会のために役だたせることができると、とらえられていたと言える。

(3) 実際の大学での家政学部像

実際の家政学部像については、実際に家政学部で学んでどうだったのかと言う観点からとらえる。本学の家政学部の教育の特徴として、Iで述べたように、家政学部共通専門科目を履修することが課せられていたことである。したがってその履修についてどのようにとらえていたか、また家政学部の教育について良かった点、問題点などについて、記述された自由意見から分析する。

① 家政学部の共通専門科目について

家政学部共通専門科目の履修に対する意見は、78％の卒業生から得ることができた。表Ⅲ-3に示すように、「履修して良かった」「卒業後生活に役だった」「広い視野が得られた」「幅広い知識が得られた」など肯定的な意見をあげるものが6割を占めて一番多い。しかし「約にたたなかった」「早く専門を学びたかった」「不必要」など良いとは思わないとする意見のものが2割強い

表Ⅲ-3 家政学共通専門科目をうけて良かった点（件／％）

		良いと思う		特になし あまり感じない あたり前		良いとは思わない	
児童		121	57.3	51	24.2	39	18.5
食物		218	77.6	27	9.6	36	12.8
社会福祉		12	48.0	2	8.0	11	44.0
理Ⅰ	物理	23	42.6	8	4.8	23	42.6
	数学	31	46.3	15	22.4	21	31.3
	化学	29	40.3	8	10.1	35	48.6
理Ⅱ		59	50.0	11	9.4	48	40.6
住居		92	45.5	49	24.3	61	30.2
被服		194	84.7	17	7.4	18	7.9
家政経済		111	67.7	29	17.7	24	14.6
全体		890	62.5	217	15.3	316	22.2

る。そのほか「受けるのは当たり前と思った」「あまり感じない」「特になし」「良く覚えていない」などとする意見もある。

学科別では、被服、食物、家政経済、児童の卒業生に、肯定的な意見のものが多いのに対し(55%以上)、理Ⅰ化学の卒業生は否定的な意見のものの方が多い。そのほか理Ⅰ数学、理Ⅱ、住居では、肯定的な意見が一番多いが否定的な意見のものも多い、理Ⅰ物理、社会福祉の場合は、肯定するものと否定するものにほぼ2分するなど、各学科により異なった傾向にある。特に現在、理学部となった理Ⅰ物理、化学、理Ⅱに(数学のみ3割)、また文学部、人間社会学部へと変更した社会福祉に、否定的な意見のものが4割以上いるのが特徴的である。すなわち「専攻と関係なく、早く専門を学びたかった」を代表とする意見が多くみられたことから、これらの学科では、家政学部との関係に違和感を感じていた学生も多くいたと言えよう。

しかし「今考えると良かった」とする意見もあり、学生時代にはその意義がわからなくても、卒業後にその意義が理解される科目となっているとも言える。

② 家政学部の教育を受けて良かった点・問題点

家政学部の教育を受けて、良かった点についての自由記述によりまとめた結果を、表Ⅲ-4に示す。

これら意見は大きくまとめると、「教育内容」「人との出会い」「家政上の技術の取得」「職業や仕事、資格取得」「人間形成・価値観の確立」「学校の雰囲気・伝統」「自信、自負」に関することなどに、分けることができる。

全体的には「教育内容」について評価するものが一番多い。この教育内容については、さらに、1) 幅広い教育、広い知識、広い視野をもてた、2) 専門的な内容、学びたいことを学べた、3) 実学、実生活に役立つ、生活者としての視点で、とらえることができるようになった、4) 科学的な視点を得た、問題意識を持つようになった、5) 人間の基礎・基盤が学べた、家政学の重要性を知った、家庭の大切さを知った、などの意見にまとめられる。なかでも、3) 実学、実生活に役だった、5) 人間の基礎、家政学の重要性を学べた、1) 広い視野をもてた、などとする意見

表Ⅲ-4 家政学部の教育の良かった点(自由意見) (件)

	児童	食物	理Ⅰ			理Ⅱ	住居	被服	家政 経済	社会 福祉	全体	
			化学	数学	物理							
人との出会い	13	16	3	4	3	6	12	11	16	2	86	
家政上の技術の取得	22	55	2	4	4	3	8	1	8	1	108	
職業・資格取得・仕事一般	9	29	1	2	1	1	15	15	7	2	82	
学校の雰囲気・伝統	4	1	3			3	4	2	5		22	
自負・自信	4	6		1	1	1	7			20		
人格 価値 形成	考え方、行動の基礎	8	11	4	4	5	11	9	16	17	1	86
	女性・人間としての教育	20	13	4	1	1	2	11	3	12	1	68
教育	広い視野		21	15	3	10	5	14	11	17	6	3
	専門的な内容	17	29	6	3	1	4	17	15	5		97
	実学、実生活に役立つ	20	66	3	4	3	9	35	67	22	2	231
	科学的な視点	1	7	1		1		1	3	1		15
	人間の基礎、家政学の重要	19	13	3	8	1	5	27	10	17	2	105
その他	7		5	7		15	5			3	42	

を評価しているものが多い。そのほか「人格形成・価値観の確立」「家政上の技術の取得」「人との出会い」「職業や仕事、資格取得」も高く評価されている。

学科別にみると、「教育内容」では児童は、1) 広い視野を得た、3) 実学・実生活に役立つなどが、食物では、3) 実学、実生活に役だった、が圧倒的に多いが、2) 専門的な内容、学びたいことを学べた、ことを良かった点として評価しているものも多い。住居、被服、家政経済も、3) 実学、実生活に役だったと評価するものが一番多いが、さらに住居は、2) 専門的な内容、学びたいことを学べた、被服は、1) 広い視野をもてた、家政経済は、5) 人間の基礎・基盤が学べたと評価するものも多く、学科によりその傾向は若干異なっている。「教育内容」「人格形成・価値観の確立」以外では、児童、食物では「家政上の技術の取得」を評価するものも多いが、児童の場合は「人との出会い」を、食物では「職業や仕事、資格取得」を評価するものも多い。そのほか住居、被服では、「職業や仕事、資格取得」を、家政経済では「人との出会い」を評価するものが多くなっている。なお理Ⅰ、理Ⅱなどの理学系の卒業生による、家政学部の教育の良さに対する評価は少ない。

一方家政学部の教育を受けての問題点については、大きく6つの問題点に集約される。すなわち「家政学部の社会的認知が薄い」（花嫁修業的なイメージが強く、家政学部の社会的評価が低いことや家政学としての学問的位置づけが明確でない）、「幅広い分野を学ぶことができたが、専門性に欠けると感じた」（中途半端、専門分野を掘り下げて学べない、専門の基礎的学問の力の弱さを感じた）、「グローバル・ダイナミックな視点の欠如」（生活の面に偏りすぎていたため視野が狭い、狭い学問である）、「他学部、他大学との交流がなかった」（閉鎖的）、「家政学部の名称および家政学士に抵抗があった」「各分野の専門に走り、学部としての総合性に欠ける」（系統的なカリキュラムの必要性を感じる）などである。なおこれらの問題点は、学科に共通してあげられた問題点であるが、中でも「家政学部の名称、家政学士に抵抗があった」あるいは「工作上、デメリットを感じた」と言う問題点については、理Ⅰ物理、数学、化学、理Ⅱ、住居、家政経済などの学科の卒業生があげていると言うのが特徴的である。

(4) 卒業時の家政学部像

卒業時の家政学部像としては、卒業直後の進路により分析する。

全体的に「職業について」とするものが圧倒的に多い（80.8%）。次に多いのが「さらに勉学を続けた」（7.1%）と「結婚した」（6.9%）とするものであるが、両者合わせても15%に満たない。この傾向は学科による差はないが、理Ⅱ（10.6%）、被服（8.4%）、住居・児童（8.0%）、食物（7.7%）に「さらに勉学を続けた」とするものが、また「結婚した」とするものが児童（10.8%）、食物（9.3%）、被服（7.6%）にやや多くなっているのが目立つ。したがって「職業について」とするものは、理Ⅰ数学、化学、物理、家政経済、住居に多いのに対し（85%以上）、被服、理Ⅱ、食物、児童（74%以上）が少なくなっている。特に児童の場合、「稽古ごとなどの修業をした」とするものも5.2%いるため、「職業について」とするものの率が一番低くなっている。

卒業直後、職業についてのものその業種と職種の全体的傾向を見ると、まず業種としては「教育」が一番多く（23.8%）、次に「製造」（17.1%）「建設」（10.5%）と続いている。職種としては「事務・秘書」（23.9%）が一番多く、続いて「教員」（21.2%）「研究」（13.9%）となり、これら教育と研究で1/3を占めている。

なお業種、職種ともに、学科によりその傾向は異なっている。すなわち業種については、児童

では「教育」(58.9%)に、住居は「建設」(62.0%)に就くものが非常に多いのに対し、食物は「製造」(25.4%)と「教育」(22.3%)がほぼ半分を占めている。理Ⅰ物理、数学では、その割合はやや異なるが「製造」「教育」「情報処理」の3業種に就くものが多いのに対し(それぞれ2割以上)、理Ⅰ化学は、数学、物理と同様の傾向にあるが、「調査・研究」(21.3%)に就くものが多いのが異なっている点である。理Ⅱは「教育」(23.4%)「研究・調査」(19.8%)に就くものが多い。被服も「教育」(25.5%)が一番多いが、「製造」(20.8%)「卸・小売」(13.4%)に就くものも多い。家政経済は「金融」(22.3%)に就くものが多いなど、それぞれ専門と関連のある業種に就いていると言える。一方職種については、児童は「教員」(54.0%)、理Ⅰ化学・理Ⅱは「研究」(50.6%)、住居は「設計」(58.3%)、理Ⅰ物理、数学は「システムエンジニアリング(SE)」(38.2%, 45.3%)、家政経済は「事務・秘書」(51.9%)が多くなっているのに対し、被服は「事務・秘書」(29.4%)と「教員」(24.8%)が、食物は「事務・秘書」(26.8%)と「研究」(20.0%)のほかに「栄養士」(17.9%)などの職に就くものも多く、その傾向は学科により異なっている。

したがって卒業直後に職に就いたものは、家政学部、特に学科で学んだことを少しでも生かせる業種、職種に就いていると言えよう。

(5) 卒業後の家政学部像

卒業後の家政学部像としては、家政学部で学んだことが、卒業後の日常生活、職業、社会的な活動など、これまでの生活にどの程度生かされているかと言う観点からとらえる。

まず全体的には、日常生活に「生かされている」とするものが76.1%、職業に「生かされている」とするものは66.8%、社会的な活動に「生かされている」とするものは42.2%となり、その割合は日常生活、職業、社会的な活動の順に減少している。つまり日常生活にはかなり生かされているが、職業や社会的な活動にはあまり生かされていないと言える。と言うのは「生かされていない」とするものが、職業、社会的な活動に対し、それぞれ17.0%いるからである。

これを学科別にみると、まず日常生活への影響としては、ほとんどの学科で「生かされている」とするものが多い。なかでも食物の場合9割強のものが、被服では8割強のものが生かされているとしているが、児童、社会福祉、住居、家政経済、理Ⅱ、理Ⅰ化学の順に生かされているとするものの割合は減少し、最も少ないのが理Ⅰ物理である。なお「生かされている」とするものの、次に多いのが「どちらともいえない」とするものであるが、特に理Ⅰ物理の場合、「生かされていない」とするものが多いが目立つ(23.8%)。

一方職業への影響としては、同様に「生かされている」とするものが一番多いが、なかでも一番「生かされている」とするものが多いのが住居である。そのほか児童、食物、理Ⅰ数学では約7割、理Ⅰ化学、被服では6割強のものが、理Ⅰ物理、理Ⅱ、家政経済では約半数となっている。なお住居を除くすべての学科で1割ないし2割のものが、職業に「生かされていない」としているが、特に家政経済、被服、理Ⅱに多いが目立つ。

さらに社会的な活動については、「生かされている」とするものの割合は減少し、「どちらともいえない」とするものが多くなっている。「生かされている」とするものの方が「どちらともいえない」とするものより多いのは、児童、食物、社会福祉、家政経済であり、中でも児童、食物に「生かされている」とするものが多い。これに対し「どちらともいえない」とするものの割合の方が多いのは、理Ⅰ物理、数学、化学、理Ⅱ、住居である。被服のみ「生かされている」とするものと「どちらともいえない」とするものの割合がほぼ同じであるなど、学科により3つのグ

ループに分けられる。なお社会的な活動に「生かされていない」とするものの割合が、日常生活、職業に比べ多くなっているのが特徴的である。特に「生かされていない」とするものが最も多いのが理Ⅰ物理（32.8%）であり、最も少ないのが児童（10.3%）である（社会福祉を除く）。

以上のことから日常生活、職業、社会的な活動への影響として、目立った大きな差異は見られないが、学科により若干異なった傾向にあると言える。

これらの生かされているとする理由については、全体として、まず日常生活では、「良い友人を得ることができた」（48.5%）、「広い視野で考えることができた」（46.3%）、「専門知識や技能が身についた」（43.9%）などの理由を約半数のものがあげている。この3つの理由をあげるものが多いのが被服である。特に「良い友人を得ることができた」と「広い視野で考えることができた」というこの2つの理由は、食物を除くすべての学科で、多くのものがあげているが、理Ⅰ数学、化学に多い。この2つの理由のほかに「自分の価値観を形成できた」または「専門的知識や技能が身についた」という理由をあげるものも多く、前者に該当するのが理Ⅰ物理、児童、理Ⅱ、住居、家政経済であり、後者に該当するのが被服である。なお「良い友人を得ることができた」とする理由をあげるもの以上に、「専門的知識や技能が身についた」とする理由をあげたものが圧倒的に多いのが食物である（74.6%）。

次に職業に生かされている理由としては、どの学科も「専門知識や技能が身についた」をあげるものが圧倒的に多く、次に多いのが「広い視野で考えることができるようになった」であるが、その割合は前者の理由をあげるものの約半分にすぎない。そのほか「社会的に評価の高い大学をでた」を理由とするものも、各学科とも2割～3割いる。なお学科による違いはほとんどないが、しいて言えば家政経済に「広い視野で考えることができるようになった」とするものが（53.3%）、住居、食物、家政経済に「良い教員と出会うことができた」（23.7%～28.0%）とするものが、理Ⅰ数学に「人とのつきあい方が身についた」（22.1%）とするものが、被服に「所属学科以外の知識が身についた」（24.8%）とするものが、やや多くいると言える。

社会的な活動に生かされている理由では、「広い視野で考えることができるようになった」を6割弱のものがあげている。次に多いのが「自分の価値観を形成できた」（27.8%～39.1%）、「人とのつきあい方が身についた」（25.8%～41.7%）であり、これら3つの理由をあげるものが多いというのが、ほとんどの学科（理Ⅰ物理、社会福祉を除く）での共通点となっている。さらにこれらの理由のほかに、住居、被服では「よい友人を得ることができた」（26.7%、30.0%）、児童、食物では「専門知識や技能が身についた」（27.3%、28.1%）をあげるものが、それぞれ多くなっているのが目立つ。理Ⅰ物理は「広い視野で考えることができるようになった」（50.0%）、「自分の価値観を形成できた」（31.3%）、「良い友人を得ることができた」（31.3%）のほかに、「生きていく上で精神的な支えを得た」（25.0%）と言う理由をあげるものが多く、ほかの学科とやや異なった傾向にある。

以上のことから、日常生活については学科によりその理由の傾向はやや異なるが、職業、社会的な活動については、学科による大きな差異はないと言える。

なお社会活動を経験したことがあるとするものが64.5%いるが、その社会活動にあたって家政学部で学んだことが生かされているかについては、地域団体（例えば公立高校のPTA、地域の婦人会、子供会など）に携わったものの約半数のものが、また有志団体（例えば大学婦人協会、YWCAなど）や社会福祉団体（例えば更正保護婦人協会、点訳、介護など）などに携わったものは、地域団体よりも少ないが、両者ともに生かされているとするものが多い。

したがって家政学部で学んだことは、これまでの生活（日常生活、職業、社会的な活動）にある程度生かされているととらえられる。

最後に、家政学部の教育が、自分の全人的な発達に影響しているかどうかについては、「影響している」とするものが67.1%となり一番多いが、「どちらともいえない」とするものも29.0%いる。学科別では食物に最も多く（79.8%）、次に社会福祉→児童→家政経済→被服→住居（65.1%）と続き、影響しているとするものの割合は8割から6.5割に減少している。特に現在、理学部である理Ⅰ、理Ⅱの学科の場合、理Ⅱに「影響している」（60.6%）とするものが最も多いが、理Ⅰでは化学、数学と減少し、この「影響している」とするものの割合は、中でも物理に最も少なく（38.6%）、「どちらでもない」とするものが多い。なお「影響していない」とするものが一番多いのが理Ⅰ物理である（14.0%）。したがって理系出身者の人的発達にとっては、家政学部の教育はあまり効力を発揮していないと受けとられていると言える

なお全人的な発達への影響についての自由意見をまとめたのが表Ⅲ-5である。表より「人との出会い」が一番多く、次に「人格形成への影響（女性の自立を含む）」「学校の伝統や雰囲気」「教育」「成瀬先生の教育理念」などが、続いてあげられており、大学、学寮、家政学部で学んだことが、多くの卒業生の全人的発達に大きな影響を与えていることを、確認することができた。

表Ⅲ-5 全人的発達への影響としての意見（一部のみ掲載）（件）

人との出会い (170)	すばらしい教授、友人に恵まれた。 先輩の教授の活躍している姿に、影響を受けた。 先生方の志や態度、友人たちのものの考え方や生き方など 4年間女子大学で学んだ学問、培った人間関係は、私の人生にとって大きな宝物である。
学校の伝統や 雰囲気 (143) 学生生活	寮生活で得た経験、友人が影響している。 他人に対する思いやり、協調性が身についた。 女子大の校風は、生活での基本的な姿勢となっている。
人格形成 (153)	女性のスペシャリストの家政学部はやりがいがあり、自分の存在を確かめることができた。 女性として一人の人間として自立し自分の考え、展望をもつことができるようになった。 女性の自立の大切さを学んだ。
教育 (91)	人間としての生き方の基本を学んだ。 知識は浅いが、広く物事を見られるようになった。 家政学を科学的に学ぶことができた。 基礎を学んでいるので、深く理解できる。
教育理念 (78)	日本女子大の教育理念に影響を受けた。 本学の建学の精神が、日常生活の支えとなっている。 創立者の教育理念が、知らず知らずのうちに身についた。
職業 (43)	先生方の自分の専門の学問を愛している姿を思い出すたびに自分の職業にたいする態度を反省させられる。 好きな分野を勉強し、それを生かした職業にも就けた。 今の職業を選択する基盤となった。
家政上の技術 (37)	子育ての上で。生活の基盤のところ。主婦になったとき少なからず役立っている。 食生活、住居に学んだことが生かされている。
自信 (33)	仕事に就いてから、家庭生活についてから、自信を持って行動ができるのは、大学時代の教えに基づいている。 本学で学んだことにより、自分に自信がついた。 自分に自信をもつことができ、広い視野で物事に対処するようになった。

新制大学以降の家政学部卒業生に対するアンケート調査より、卒業生からみた家政学部像を明らかにすることを試みた。その結果、入学前の家政学部像としては、自分の適性にあった学科(学部)を選択し、専門性の高い教育が受けられることを期待している。実際家政学部で学んだことに対しては、家政学部の教育、特に家政学部の教育の特徴である家政学部共通専門科目を学んだことを評価し、しかも家政学部で受けた教育を生かすべく、卒業後は多くのものが就職している。卒業後の生活においては、日常生活の面で家政学部で学んだことが生かされているとするものが多いが、職業、社会的な活動に生かされているとするものは少ない。特に前述した家政学部共通専門科目については、学生時代にはその意義があまり感じられなかったが、卒業後職場や家庭生活に入って、その意義を理解したとするものもあり、家政学部の教育が卒業後に浸透、理解されるようになると言える。

なお家政学部の方向・あり方についての自由記述による意見(1,012件)より、卒業生のイメージしている家政学部像をまとめると以下ようになる。すなわち「人間が生きていくための術、あるいは人間生活という視点から追究するのが家政学であり、生活を支える基本、社会の中で生きることを考える場が家政学部である」ととらえている。そのほか「家政学=女性だけの学問ではない」「家政学は、これからは男女ともに、あるいは男性にとって学ぶ必要のある学問である」と言う意見もあげられている。その家政学部への希望としては、「伝統にしばられず、時代にあった学問を行うことにより、社会人として精神的に強い人間を育て、新しい文化を生みだしてほしい」「人間、社会人、家庭人として自立できる人間の育成、また社会に役立ち、かつ時代に即した、専門性のある教育を」などという要求がなされている。

したがって家政学部の教育を受けた卒業生の態度、意見から、日本女子大の教育理念である「人としての教育」の柱としての家政学部構想が、着実に浸透していることが裏付けられた。

3) 通信教育課程卒業生に対する調査から

(1) 調査対象者の概要

対象者の入学前の出身校は「短期大学」と「全日制高校」が多く、両方で約70%を占めるが、旧い回生では「旧制女学校」「旧制女子専門学校」「師範学校」などの旧制度の学校出身者もみられ多様である。出身校とも関連して入学形態では、「1年次入学」と「編入学」で90%以上を占め、「学士入学」は少ない。入学時の年齢も、「19歳以下」から「50歳以上」までと幅広いが、「20から24歳」の年齢層が最も多く、24歳以下の入学者が全体の半数を、その一方で30歳以上が約1/4を占める。通信教育課程(以下「通信」)の場合、もともと出身校や取得単位数により修業年限は2年から4年と幅があるが、実際の在学期間では「4年から5年」が最も多く、「6年から7年」と続くが、10年以上の在学も10%以上を占め、各学生の事情により差は大きい。

入学時に職業を持つ者は全体の約80%で、食物学科の有職率が最も高いが、全体的に近年は減少傾向にある。その職種は「教員」が最も多く、「事務・秘書」「栄養士」と続くが、「教員」は減少傾向にある。学科別では生活芸術学科に「教員」が、児童学科に「事務・秘書」が、食物学科に「栄養士」が3学科中最も多い。入学時の職業を在学中も継続した者は80%以上を占めるが、その一方で10%の者が転職し、8%の者が退職している。

なお現在の生活については、対象者の80%以上が既婚者で、その子どもは2人が最も多い。また家族の人数は2人が最も多く、次いで4人である。

(2) 入学前の家政学部像

では対象者は入学前にどのような家政学部像を抱いていたのか、学科選択の動機から探っていくが、その前に「通信」を選択した理由を検討する。「通信」の選択理由としては「職業と両立できる」が最も多く、以下「家庭の事情に応じて学べる」「仕事の事情に応じて学べる」「生涯学習として学べる」の順である。入学者が多様で有職者も多いことから、職業や家庭との両立が重視されているが、その一方で生涯学習のために入学する者も増加傾向にある。学科別では「職業と両立できる」は食物学科に最も多く、「家庭の事情に応じて学べる」が児童学科に、「生涯学習として学べる」は生活芸術学科にやや多い。

「通信」は児童・食物・生活芸術の3学科から構成されるが、学科を選択した動機（複数選択）では、「専門の勉強がしたかった」が最も多く、次いで「資格、免許を取りたいと思って」が続く。専門や資格・免許という職業につながる動機が共に50%以上と他を大きく上回っている。他には「自分の適性に合っている」「社会的視野を広げる」「将来社会の役に立ちたい」「女性としての将来に役立ちそう」などの動機が続いている。学科別では食物学科に「専門の勉強」が、生活芸術学科で「資格、免許」が多くなっている。

以上のような結果から、職業や家庭との両立や生涯学習などを旨とする「通信」入学者では家政学部の各学科に対して専門性や免許（教員）取得を期待する者が多いが、その一方で社会的視野を広げ、社会に役立つこと、女性の生活に役立てることも期待している。つまり家政学部は専門を身につけ免許が取得できる学部であり、同時に幅広い教養と女性の将来生活に関わる内容が学べる学部と捉えられている。

(3) 大学在学時の家政学部像

では「通信」の教育はどのように受けとめられているのか、家政学部の「共通専門科目の履修」および「学んでよかった点」「問題点」の自由記述から探り、大学在学時の家政学部像を検討する。

「通信」でも家政学部の共通専門科目を履修するが、全体の90%以上の者がそれを肯定的に評価している。評価の具体的内容としては「教養が身についた、視野が広がった」が最も多く、次いで「学んでよかった」で、以下「当然だと思って履修した」「家政学の基礎、全体を学んだ」「自分の専門以外の学習ができた」の順である。多くの者が家政学を広く学び、教養が身についたと評価している。

「通信」で「学んでよかった点」では「スクーリング」に関するものが最も多く、次いで通信の「教育」に関するもの、通信独自の「学習形態」に関するものが多く、以下「職業・資格取得」「卒業できたこと・その自信」「人間形成・価値観」「学ぶ喜び・生涯学習」「校風・教育理念」の順である。特にスクーリングにおける「友人・仲間」との交流や「教員」との出会いをあげる者が多い。職業や家庭と両立しながら通常は自宅で学ぶ学生たちにとって、多くの仲間と出会い、直接教員の講義を受講でき、実験や実習を体験できる夏期スクーリングが大学生活に刺激を与え、学習継続の大きな支えとなっている。学習形態については「自分のペースで学べる」ことが最も評価されている。教育面では「専門教育」をあげる者が最も多いが、同時に「教養・広い視野」を評価する者も多くみられる。

一方「問題点」ではよかった点同様に「スクーリング」に関するものが最も多く、次いで「教育」に関するもの、「学習継続」に関するものが多く、以下「職業・資格取得」「通信に対する偏見」「友人との交流」「教員とのふれあい」の順である。こうしてみると「通信」の利点は同時に

問題点にもなっている。つまり大学生活に刺激を与え、学習継続の支えになるはずのスクーリングへの「参加が困難」であること、学習継続に関して「自分のペースで学べるが、意志を強く持たないと誰も促してくれないので挫折しやすい」といった「独学の困難」や「職業との両立」の困難さが問題点として指摘されている。教育面でも「試験・レポート」や「質問・指導」への対応に不満があり、「学力不足、学習が深まらない」ことも問題とされている。

以上のように、「通信」の教育に対して、共通専門科目の履修を通して家政学を広く学び教養が身についたと評価する者が多く、教育の専門性や資格取得、同時に教養や広い視野、人間形成面でも評価する者が多い。これは入学前の家政学部像に共通する。しかしその一方で、職業や家庭と両立できるから選択された「通信」という独特の教育・学習形態においても学習継続の困難、免許のための教育実習参加が困難、さらには学力不足などの問題が生じている。

(4) 卒業時の家政学部像

卒業時の家政学部像について、卒業直後の進路から探ってみる。卒業直後には「それまでの職業を継続した」が最も多く、次いで「新たに職業について」で、職業生活を選択した者が70%以上を占めているが、入学時の有職率よりは減少している。以下、「さらに勉学を続けた」「結婚した」の順であるが、勉学を続ける者は増加傾向にある。新たに就いた職種では、「教員」がずば抜けて多く、「事務・秘書」「栄養士」「福祉指導」が続いている。このように卒業直後には職業生活を選択する者が多く、後述するように「通信」の教育が職業に生かされたものと思われる。在学中の職業を継続する者は減少傾向にあるが、対象者に入学時から教員が多いこともあり、卒業直後も教員を継続する者、新たに教員になる者が多く、その面では専門・資格を生かした進路となっている。つまり卒業時においても専門・資格を生かした家政学部像がみられる。しかし近年は入学者における教員の比率が低下しており、また教員採用状況の厳しさを反映してか資格取得者も、教員になる者も減少傾向にあり、進路の多様化傾向がみられる。

(5) 卒業後の家政学部像

卒業後の家政学部像について、「通信」における学習の卒業後の生活、すなわち「日常生活」「職業」「社会的な活動」への影響と全人的な発達への影響から検討する。

まず「日常生活」に「生かされている」とする者が90%と圧倒的多数を占める。その理由として「広い視野で考えることができる」「生きていく上で精神的な支えを得た」が共に多く、以下「よい友人を得ることができた」「専門的知識や技能が身についた」「自分の価値観を形成できた」の順である。また「職業」の面でも「生かされている」者が80%と多数を占め、理由として「専門的知識や技能が身についた」がずば抜けて多く、次いで「広い視野で考えることができる」で、以下「所属学科以外の知識が身についた」「よい教員と出会うことができた」の順である。最後に「社会的な活動」では「生かされている」者は65%と日常生活や職業の場合に比べると低くなっているが、生かされている理由としては「広い視野で考えることができる」が最も多く、以下「自分の価値観を形成できた」「リーダーシップが身についた」「生きていく上で精神的な支えを得た」「専門的知識や技能が身についた」の順である。

このように80%以上の卒業生では、「通信」での教育が家庭生活および職業に生かされ、65%の卒業生で社会的な活動に生かされている。

次に「通信」の教育の全人的な発達への影響についてであるが、全人的な発達に「影響している」と答えた者が84.4%を占め、「どちらともいえない」が14.4%で、「影響していない」は1.2%とごくわずかである。「影響している」主な理由としては「卒業したことが自信・誇りにな

った」が最も多く、次いで「人間形成、生き方」「学習意欲・習慣、生涯学習」「最後までやり遂げる意志、努力」が多く、以下「広い視野、価値観、ものの見方」「創立者の教育理念、三代綱領」「友人・先輩との交流」の順である。これらの理由には「通信」独特の教育や学習形態に関わるものが多くみられるが、同時に広い視野や価値観、生き方などもあげられている。その一方で創立者の教育理念や三代綱領なども全人的な発達に影響している。

以上のように、卒業後の家政学部像は職業や日常生活、さらには全人的発達に生かされるものとして捉えられているが、具体的には専門的知識や技能とともに、広い視野や学科の枠をこえた幅広い知識の習得、価値観の形成や精神的な支え、リーダーシップ育成などが含まれている。

本調査にみられる「通信」卒業生では入学前、大学在学時、大学卒業時、卒業後と一貫して専門的知識や資格という職業・専門と関わる学部像と、その一方で教養や広い視野、価値観、人間形成といった本学の伝統的な教育の流れがみられる。

4) 家政学研究科修了生に対する調査から

(1) 調査対象者の概要

調査の対象となった修了生は、大学卒業後すぐに進学した場合には、1回生は62歳、38回生は25歳である。したがってかなり年齢の幅が広いが、実際に修了時の年齢をみると、最も多いのが24～25歳で、全体の65.4%であり、26～29歳、16.1%、30～39歳、11.3%、40歳以上、4.1%である。したがって、大学院の場合には、全体の三分の一は、大学卒業後すぐに進学した学生より年齢の高い学生が在籍していることになり、実際には62歳以上の修了生がいることになる。また、出身大学では、本学が69.0%を占めている。さらに、全体の70.2%が既婚者であり、子どもの数は、なし(19.3%)、1人(27.6%)、2人(39.1%)、3人以上(14.0%)である。

(2) 入学前の家政学研究科像

入学前の状況は、全体の71.3%が大学卒業後すぐに大学院に進学しているが、専攻別にみると、被服(以下、専攻を省略)が最も割合が高く(84.4%)、次いで食物・栄養(75.0%)であり、生活経済は最も低く(46.2%)になっている。生活経済は、開設されてから年数が浅く、いったん社会に出てから現職のまま大学院に進学した者が多いことがわかる。

また住居では就職後退職して進学した者が29.2%になっていることは、専攻の特徴を表しているといえる。食物・栄養でも19.5%であり、同様の傾向がみられる。

大学院への進学動機としては「専門的な研究がしたかった」が454名、全体の89.7%である。次に多い動機は、「指導を受けたい先生がいた」であり、197名で38.9%となっている。

しかし、「日本女子大学の大学院に進みたい」では、最も多い児童が23.6%であるが、最も少ない被服でも13.3%の回答があった。「大学の指導教員に勧められて」という回答も同じような割合を示している。「資格・免許を取りたい」、「家族に勧められて」、「家政学的な視点を学びたかった」という動機も全体としてそれぞれ約8%みられる。

学費(複数回答)については508名中394名が「親族の援助」によっているが、これは77.9%にあたる。「日本育英会奨学金」の占める割合が全体で31.6%、多い児童では38.7%、少ない被服では22.2%となっている。「その他の奨学金」を合わせると、一番多い住居では59.1%になっている。「自己資金」の割合は全体で25.3%であるが、現職のまま進学した者が多い生活経済では、61.5%にもなっている。

(3) 修了時の家政学研究科像

修了後の状況では、全体の68.1%がすぐに就職している。その割合が一番高いのは被服(84.4%)であるが、食物・栄養と住居では同じ割合(71.1%)を示している。しかし、博士課程に進学した割合が一番高いのは住居である(17.8%)。実数は少ないが、生活経済でも博士課程への進学者は多くなっている。一方、児童では、すぐに就職した者は56.6%であった。修了後就職した者と、入学前からの仕事を続けた者について、その業種・職種・勤務形態について尋ねた。

業種では、全体として教育が最も多く(50.4%)、次いで調査・研究(16.3%)、医療・福祉(9.1%)、建設(7.2%)、製造(5.8%)である。専攻別では、教育の割合は被服が最も高く(73.7%)、ついで、児童(53.0%)、食物・栄養(56.4%)であるが、住居は18.8%である。また、医療・福祉関係では、児童(31.8%)、食物・栄養(6.4%)のみである。

住居で最も多いのは建設関係(40.6%)であり、調査・研究(21.9%)がそれに次いでいる。調査・研究は食物・栄養でも19.1%を占めている。また製造は、食物・栄養(8.5%)と被服(7.9%)にみられるが、他の専攻にはほとんどない。

職種では、教員が最も多く、全体で40.5%、次いで、研究(31.2%)、SE(5.2%)、設計(4.9%)となっている。これを専攻別にみると、児童では、教員(40.9%)、研究(15.2%)、福祉指導(6.1%)、事務・秘書(4.5%)となっている。食物・栄養では教員(45.3%)、研究(41.1%)であり、この2職種で96.4%を占め、圧倒的に多くなっている。住居では、研究(31.3%)、設計(28.1%)、教員(15.6%)、事務・秘書(9.4%)である。被服では、教員(60.0%)、研究(12.5%)、事務・秘書(10.0%)である。

勤務形態は、全体としてフルタイムの勤務が69.9%であるが、専攻によつての違いが大きい。たとえば児童ではフルタイム47.0%に対して非常勤・臨時勤務は39.4%であり、住居では93.9%がフルタイムである。また、食物・栄養では72.3%、被服は55.0%である。次に、非常勤・臨時の勤務者は、前に挙げた児童の39.4%、被服の32.5%、食物・栄養の19.1%であった。

就職をした者の転職経験は、全体で44.0%があると答えている。専攻別では、児童(60.3%)、住居(59.4%)が多く、食物・栄養(37.1%)、被服(28.9%)がそれについている。

現在就職していない者127名の再就職の希望については、希望するものは73名(57.5%)であった。専攻別では、児童19名(希望なし7名)、食物・栄養26名(40名)、住居16名(4名)、被服9名(2名)、生活経済3名(1名)となっている。なお、希望業種は教育が多く、全体の60.9%を占め、それについて調査・研究18.8%、医療・福祉7.8%の順であった。

社会活動の経験については、全体では「現在活動している」(50.2%)、「過去に活動した経験がある」(20.9%)、「今後活動してみたい」(12.8%)であり、合計すると83.9%が社会活動に積極的である。割合が高いのは児童(66.0%)、低いのは住居(40.0%)、生活経済(38.5%)であった。

次に、「社会活動を現在している」、「過去にしていた」361名の修了生に対して、その種類を尋ねた。複数回答であるので、多い順に、地域団体(165名)、研究団体(158名)、職域団体(71名)、趣味サークル(68名)、同窓会(67名)、有志団体(66名)、学習サークル(53名)となっている。この傾向は各専攻においてもほぼ同じであった。

公職の経験については、「現在ついている」という回答が全体で13.0%であり、かなり少ない。専攻別では、住居17.5%、児童17.0%、食物・栄養11.8%となっていた。

(4) 修了後の家政学研究科像

日常生活への影響としては、全体で「生かされている」(76.4%)、「どちらともいえない」(19.7%)となっている。専攻別では、「生かされている」の割合が、食物・栄養(81.3%)、児童(79.8%)、生活経済(69.2%)、住居(68.9%)、被服(57.8%)である。日常生活に生かされている理由(複数回答)では、最も多いものが「広い視野で考えることができる」であり、388名中215名が回答している。順に、「自分の価値観を形成できた」(192名)、「専門的な知識や技能が身についた」(146名)、「精神的な支えを得た」(132名)、「よい友人を得ることができた」(131名)、「よい教員と出会うことができた」(90名)となっている。

次に職業への影響については、全体で85.6%が「生かされている」と答え、「どちらともいえない」(8.4%)、「生かされていない」(6.0%)となっている。日常生活の場合よりも影響が大きいことは明らかである。また、専攻別にみると、食物・栄養(90.1%)、児童(85.4%)、生活経済(81.8%)、住居(79.1%)、被服(75.6%)となっている。その生かされている理由(複数回答)は407名中、多い順に、「専門的な知識や技能」(355名)、「よい教員」(188名)、「広い視野」(163名)、「自分の価値観」(94名)、「社会的に評価の高い大学院を出た」(65名)となっている。また、「よい教員」は46.2%、「広い視野」は40.0%にあたり、これらは本大学院の特徴のひとつであると思われる。

さらに社会的な活動への影響については、全体で57.6%が「生かされている」と答え、31.5%が「どちらともいえない」、10.9%が「生かされていない」と答えている。専攻別では、「生かされている」の多い順に、児童(73.5%)、生活経済(70.0%)、住居(67.4%)、食物・栄養(50.0%)、被服(38.1%)となっている。その生かかされている理由(複数回答)では、261名中、「広い視野」(131名)、「専門的な知識や技能」(115名)、「自分の価値観」(105名)、「よい友人」(62名)、「よい教員」(57名)、「精神的な支え」(46名)、「人との付き合い方が身についた」(43名)となっている。

家政学研究科の修了生は、専攻毎の特徴がはっきりしており、それぞれの専攻を生かした職業に就いている修了生が多いことがわかった。また、既婚者で子どものいる割合が多く、職業を持っていても社会的な活動も行い、再教育についての意識も高いのである。

また「広い視野で考えることができる」、「自分の価値観を形成できた」とする修了生が多いことは、本学の建学の精神である全人的な教育の一端が浮かび上がってくるのではないだろうか。

以上1897年に示された家政学部構想が、1901年に具体化され日本女子大学校家政学部が誕生した。それ以来100年間の時代の流れにともなって家政学部構想がのように変化し、また実現されてきたのであろうか。この課題を解明する一部として、これまでも種々の調査がおこなわれてきたが、本稿では新制による家政学部の学部、通信教育課程の卒業生および家政学研究科修了生を対象に調査、分析を試みた。

その結果旧制、新制ともにそれぞれ受けた教育の内容、教育期間、卒業後たどってきた環境などはかなり異なっているが、人間としての女性を前提としたリベラルアーツの家政学部教育理念は、着実に浸透していると言える。

(学部、通信教育課程、家政学研究科別に分析した結果を、本学発行の家政学部紀要(2002)第49号⁶⁾に報告した)

Ⅲにおける注・引用文献

- (1) 日本女子大学女子教育研究所編：大正の生涯教育 女子教育研究双書5, 国土社, 1975.
- (2) 日本女子大学女子教育研究所編：昭和前期の女子教育 女子教育研究双書7, 国土社, 1984.
- (3) 日本女子大学女子教育研究所編：女子の生涯教育 女子教育研究双書3, 国土社, 1968.
- (4) 日本女子大学女子教育研究所編：日本女子大学通信教育課程卒業生に関する調査, 1991年
- (5) 通信教育創設50周年記念事業委員会：「日本女子大学通信教育の50年」日本女子大学通信教育課程, 1999年
- (6) 日本女子大学学紀要 家政学部 第49号 (2002) pp.1～30

日本女子大学の卒業生実態調査

—第1報	家政学部卒業生の場合—	住居学科	沖田富美子	他3名
—第2報	通信教育課程卒業生の場合—	教育学科	真橋美智子	他3名
—第3報	家政学研究科修士の場合—	被服学科	佐々井 啓	他3名

目 次

- 日本女子大学家政学部の100年——どのような卒業生を送り出したか——
A Century of the Department of Home Economics in Japan Women's University
—The Destiny of Graduates—
..... 研究代表者 江 澤 郁 子 ... 1
- 日本女子大学式統語および意味の理解テストJ.COSSを用いた日本語の
言語獲得過程の横断的研究
Cross-sectional Studies on Acquisition Process in Japanese Analyzed by J.COSS
(JWU Japanese test for Comprehension of Syntax & Semantics)
..... 研究代表者 小 山 高 正 ... 53
- 日本の社会福祉発達と本学社会事業学部創設の意義に関する研究
Role of the Department of Social Welfare, Japan Women's University
in historical development of social welfare in Japan
..... 研究代表者 2000年度 田 端 光 美
2001年度 牧野田 恵美子 ... 91
- 成瀬仁蔵の女子教育
——初期日本女子大学校卒業生のアメリカ留学と国際交流にみる
Naruse Jinzo's Education for Women: Early JWU Alumnae's Studying Abroad
in the U. S. and Their Promotion of International Understanding
..... 研究代表者 島 田 法 子 ... 151

日本女子大学家政学部の100年
——どのような卒業生を送り出したか——

江澤郁子（研究代表者）

真橋美智子

沖田富美子

佐々井啓

塚原典子

一番ヶ瀬康子

館岡孝

大野静枝

小川信子

宮崎礼子

赤塚朋子

目 次

はじめに	江 澤 郁 子
I 創立者成瀬仁蔵の家政学部構想	一番ヶ瀬 康子
II 家政学部の教育内容およびその変遷	
1 旧制	館岡 孝, 赤塚朋子
2 新制	宮崎礼子, 赤塚朋子
3 通信教育課程	赤 塚 朋 子
III 日本女子大学家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像	
1 旧制	真 橋 美智子
2 新制	
1) 調査の内容と調査方法	塚 原 典 子
2) 家政学部卒業生に対する調査から	沖 田 富美子
3) 通信教育課程卒業生に対する調査から	真 橋 美智子
4) 家政学研究科修士に対する調査から	佐々井 啓
IV 家政学部卒業生の社会的展開	
1 学位取得者に関する調査	館 岡 孝
2 外国人留学生について	大 野 静 枝
3 旧制・新制・通信教育——卒業後の社会的活動領域——	宮 崎 礼 子
おわりに	江 澤 郁 子

Ⅲ 日本女子大学家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像

日本女子大学の建学の精神とその使命が、家政学部の教育と研究にどのように反映されてきたのかについては、この100年の歴史において、どのような卒業生を社会に送り出してきたのかを検証することで、明らかにすることが可能となる。

特に1901年の創立時から設置された家政学部の卒業生の動向については、大正期の本学卒業生に対する調査（旧制10回生から25回を対象に1970年実施）¹⁾、昭和前期の本学卒業生に対する調査（旧制26回生から43回を対象に1982年実施）²⁾、女子大学卒業生の生活・意見調査（旧制44回生から48回、新制1回生から15回を対象に1967年実施）³⁾、女子大学卒業生の就業調査（新制1回生から16回を対象に1966年実施）³⁾などが実施され、女子の高等教育を被教育者の側がどのような受けとめかたをしていたかを、明らかにしようとの試みがなされ、報告されてきている。

そこでそれらの流れをとおしてとらえるべく、新制大学以降の卒業生を対象に（家政学部の学部及び通信教育課程の卒業生、家政学研究科の大学院修了生）、調査をおこなうこととした。

1. 旧制

日本女子大学女子教育研究所が実施した「大正期の本学卒業生に対する調査」（1970年）と「昭和前期の本学卒業生に対する調査」（1982年）を通して、旧制の日本女子大学校家政学部卒業生の家政学部像について探ることにした。学部像は入学前、本校在学時、卒業時、卒業後の各時期毎に検討したが、字数の都合上本稿ではその結果をごく簡単に述べる。詳しくは別に報告する。なお本稿でいう家政学部には、大正期の家政学部、教育学部家政科（師範家政学部）、社会事業学部、昭和前期では家政学部（家政学部第一類）、師範家政学部（家政学部第二類）、社会事業学部（家政学部第三類）を含む。

調査からみる限り、その家政学部像は専攻学部毎にかなり異なる。「家政」では女学校だけでもの足りずに入学し、学部では広い視野や教養、同時に実践的な学びを身につけ、卒業後家庭生活に生かす者が多くみられる。また「師範家政」では入学時に家事科教員免許の取得希望が多く、さらには経済的自立を目指す者も比較的多く、学部で取得した免許や専門が、卒業後の職業生活（主に教員）に生かされている。一方「社会事業」では将来社会の役に立ちたい、専門の勉強をしたいと希望して入学し、特色ある教育を受け、卒業後職業生活や社会活動に生かす者が多い。

その一方で、家政学部全体で本校共通の教育、学部の教育が精神教育として、あるいは人間形成に役立ったと評価する者が極めて多く、卒業生の生きる支えとなったり、卒業後の生活に様々な形で生かされている。

なお昭和前期の後期は戦時下であり、学部の特徴を越えた時代の影響がみられる。

2. 新制

1) 調査の内容と調査方法

まず学部の卒業生を対象に、家政学部（＝学科）を選択した動機および家政学部での教育の卒

業後の生活に対する影響、卒業後の就職の状況、家政学部での教育に対する評価などについて、また通信教育課程卒業生に対しても同様に、通信教育課程を選択した理由、学科を選択した動機、通信教育課程の教育の卒業後の生活への影響あるいは評価などについて、さらに大学院修了生に対しては、大学院への進学動機、修了後の進路、社会活動の動向、大学院在学中に受けた教育の評価などから構成されるアンケート調査をおこなった。

調査対象とした家政学部の、特に新制入学以降の卒業生は、現在（2001年3月現在）49,096名となっているが、新制1回生から新制40回生までの卒業生は、16,980名である。これら卒業生から、各学科、各回生とも1/4を無作為抽出し4,245名に、また通信教育課程卒業生に対しては、1953年3月（1回生）から1992年3月（40回生）までの卒業生の中から1/4の抽出による1,271名に、さらに大学院修了生に対しては、1963年3月から2000年3月の38回生までの808名中、住所が確認できた703名に、調査表を配布、郵送による指定期日までに回収する方法とした。調査時期は学部卒業生は、1999年9月から10月、通信教育課程卒業生は2000年5月から7月で、大学院修了生は2000年5月から8月である。回収数は学部は1,825名、通信教育課程は537名、大学院は508名となり、回収率はそれぞれ42.9%、42.3%、72.3%である（表Ⅲ-1参照）。

なお本稿では、調査結果から得られた日本女子大学家政学部の卒業生および家政学研究科の修了生をとおして、入学前、大学時での、卒業時の、卒業後の家政学部像について、特に各学科、各専攻別の分析結果をもとに報告する。

表Ⅲ-1 調査対象 配布数・回収数 (人・%)

		配布数	回収数	%	
家政学部	児童	655	286	43.7	
	食物	678	375	55.3	
	社会福祉	95	33	34.7	
	理 I	物理	808	120	34.4
		数学		64	
		化学		94	
	理Ⅱ	370	142	38.3	
	住居	649	249	38.4	
	被服	587	275	46.8	
	家政経済	403	185	45.9	
全 体	4245	1825*	42.9		
通信教育課程	児童	511	199	38.9	
	食物	464	225	48.5	
	生活芸術	296	113	38.2	
	全 体	1271	537	42.3	
家政学研究科	児童学	703	106	72.3	
	食物・栄養学		256		
	住居学		88		
	被服学		45		
	生活経済		13		

* 学科名不明の2名を含む

2) 家政学部卒業生に対する調査から

(1) 調査対象者の概要

調査対象とした卒業生は、前述したように新制1回生から40回生にまでわたっているため、年齢は現在30代前半のものから70代前半にひろがっている。調査対象者の9割のものが既婚者である。家族については、既婚者の場合4人家族が一番多いが、2人家族も多く、平均家族人数は3.69人である。現在職業をもっているものは42.3%（卒業以降の就業経験ありとする回答者は1,797名であるが、ずっと職業についている368人とついていなかった時期があるが、現在は就業している391人を合わせている）になり、半数弱のものが、現在職業についていると言える。居住地は関東近県とするものが多いが、南は福岡県から北は北海道まで全国的に散らばっている。

(2) 入学前の学生の家政学部像

入学前の家政学部像としては、入学の際の志望動機すなわち各学科選択の動機からとらえることとした。その結果の一部を表Ⅲ-2に示す。

全体的には「その学科が自分の適性に合っていると思った」とするものが一番多く（55.2%）、

表Ⅲ-2 学科選択の動機 (件/%)

学科 動機の内容	児童 (286)	食物 (375)	理 I			理Ⅱ (142)	住居 (249)	被服 (275)	家政 経済 (185)	社会 福祉 (33)
			化学 (94)	数学 (120)	物理 (64)					
専門の勉強をしたかった	138 48.3	158 42.1	43 45.7	56 46.7	28 43.8	90 63.4	159 63.9	98 35.6	44 23.8	8 24.2
家政学部発祥の大学だから	20 7.6	50 13.3	3 3.2	1 0.8		6 4.2	3 1.2	44 16.0	20 10.8	2 6.1
就職に有利だから	3 1.0	1 0.3	13 13.8	19 15.8	8 12.5	4 2.8	8 3.2	6 2.2	9 4.9	
卒業後経済的に自立したい	22 7.7	28 7.5	14 14.9	14 11.7	8 12.5	12 8.5	48 19.3	26 9.5	32 17.3	7 21.2
将来社会の役に立ちたいと思った	44 15.4	34 9.1	12 12.8	7 5.8	6 9.4	12 8.5	34 13.7	17 6.2	27 14.6	19 57.6
両親にすすめられた	36 12.6	88 23.5	17 18.1	7 5.8	7 10.9	19 13.4	31 12.4	53 19.3	25 13.5	6 18.2
資格・免許をとりたと思った	136 47.6	181 48.3	12 12.8	34 28.3	7 10.9	25 17.6	65 26.1	46 16.7	25 13.5	3 9.1
親戚・知人や先輩が本学で学んだ	28 9.8	50 13.3	10 10.6	12 10.0	5 7.8	12 8.5	16 6.4	38 13.8	15 8.1	7 21.2
教師にすすめられた	5 1.7	16 4.3	3 3.2	7 5.8	1 1.6	9 6.3	8 3.2	13 4.7	6 3.2	1 3.0
女性としての将来に役立ちそう	76 26.6	135 36.0	7 7.4	7 5.8		9 6.3	46 18.5	76 27.6	55 29.7	
その学科が自分の適性に合っている	176 61.5	165 44.0	62 66.0	79 65.8	45 70.3	83 58.5	137 55.0	167 60.7	82 44.3	11 33.3
日本女子大とにかく入りたかった	1 0.3	3 0.8	3 3.2			6 4.2		21 7.6	31 16.8	1 3.0

半数強のものが優先的な動機として選択している。次に多いのが「専門の勉強をしたかった」とするもので、半数弱のものが選択している（45.1%）。

学科別では、前者の「自分の適性にあっている」と言う意見を選択したものが一番多い学科は、物理、化学、数学の理Ⅰと被服、児童学科（以下、学科と言う表現を省略する）である（60%以上）。理Ⅱ生物と住居もその割合は多いが（50%以上）、この学科の場合は、「専門の勉強をしたかった」とする動機をあげるものの方が多くなっている（60%以上）。食物の場合は、前述の2つの動機をあげるものも多いが、「資格・免許をとりたと思った」とするものの方が（48.3%）、わずかではあるが多くなっている。この動機については、児童においても同様である。なお社会福祉の場合は、「将来社会の役に立ちたと思った」とする動機を選択したものが約6割弱いること、家政経済の場合は、食物とほぼ同じ傾向にあるが、「卒業後経済的に自立したかった」「どの学科でもいいから日本女子大に入りたかった」などの動機をあげるものも多いのが、特徴的である。以上のことから、学科により多少その動機は異なっているものの、ある程度家政学部に専門性を期待しつつ、自分の適性にあった学問ができるのが家政学部である。また家政学部で学ぶことにより、資格・免許がとれ、将来社会のために役だたせることができると、とらえられていたと言える。

(3) 実際の大学での家政学部像

実際の家政学部像については、実際に家政学部で学んでどうだったのかと言う観点からとらえる。本学の家政学部の教育の特徴として、Iで述べたように、家政学部共通専門科目を履修することが課せられていたことである。したがってその履修についてどのようにとらえていたか、また家政学部の教育について良かった点、問題点などについて、記述された自由意見から分析する。

① 家政学部の共通専門科目について

家政学部共通専門科目の履修に対する意見は、78%の卒業生から得ることができた。表Ⅲ-3に示すように、「履修して良かった」「卒業後生活に役だった」「広い視野が得られた」「幅広い知識が得られた」など肯定的な意見をあげるものが6割を占めて一番多い。しかし「約にたたなかった」「早く専門を学びたかった」「不必要」など良いとは思わないとする意見のものが2割強い

表Ⅲ-3 家政学共通専門科目をうけて良かった点（件/％）

		良いと思う		特になし あまり感じない あたり前		良いとは思わない	
児童		121	57.3	51	24.2	39	18.5
食物		218	77.6	27	9.6	36	12.8
社会福祉		12	48.0	2	8.0	11	44.0
理Ⅰ	物理	23	42.6	8	4.8	23	42.6
	数学	31	46.3	15	22.4	21	31.3
	化学	29	40.3	8	10.1	35	48.6
理Ⅱ		59	50.0	11	9.4	48	40.6
住居		92	45.5	49	24.3	61	30.2
被服		194	84.7	17	7.4	18	7.9
家政経済		111	67.7	29	17.7	24	14.6
全体		890	62.5	217	15.3	316	22.2

る。そのほか「受けるのは当たり前と思った」「あまり感じない」「特になし」「良く覚えていない」などとする意見もある。

学科別では、被服、食物、家政経済、児童の卒業生に、肯定的な意見のものが多いのに対し(55%以上)、理Ⅰ化学の卒業生は否定的な意見のものの方が多い。そのほか理Ⅰ数学、理Ⅱ、住居では、肯定的な意見が一番多いが否定的な意見のものも多い、理Ⅰ物理、社会福祉の場合は、肯定するものと否定するものにほぼ2分するなど、各学科により異なった傾向にある。特に現在、理学部となった理Ⅰ物理、化学、理Ⅱに(数学のみ3割)、また文学部、人間社会学部へと変更した社会福祉に、否定的な意見のものが4割以上いるのが特徴的である。すなわち「専攻と関係なく、早く専門を学びたかった」を代表とする意見が多くみられたことから、これらの学科では、家政学部との関係に違和感を感じていた学生も多くいたと言えよう。

しかし「今考えると良かった」とする意見もあり、学生時代にはその意義がわからなくても、卒業後にその意義が理解される科目となっているとも言える。

② 家政学部の教育を受けて良かった点・問題点

家政学部の教育を受けて、良かった点についての自由記述によりまとめた結果を、表Ⅲ-4に示す。

これら意見は大きくまとめると、「教育内容」「人との出会い」「家政上の技術の取得」「職業や仕事、資格取得」「人間形成・価値観の確立」「学校の雰囲気・伝統」「自信、自負」に関することなどに、分けることができる。

全体的には「教育内容」について評価するものが一番多い。この教育内容については、さらに、1) 幅広い教育、広い知識、広い視野をもてた、2) 専門的な内容、学びたいことを学べた、3) 実学、実生活に役立つ、生活者としての視点で、とらえることができるようになった、4) 科学的な視点を得た、問題意識を持つようになった、5) 人間の基礎・基盤が学べた、家政学の重要性を知った、家庭の大切さを知った、などの意見にまとめられる。なかでも、3) 実学、実生活に役だった、5) 人間の基礎、家政学の重要性を学べた、1) 広い視野をもてた、などとする意見

表Ⅲ-4 家政学部の教育の良かった点(自由意見) (件)

	児童	食物	理Ⅰ			理Ⅱ	住居	被服	家政 経済	社会 福祉	全体	
			化学	数学	物理							
人との出会い	13	16	3	4	3	6	12	11	16	2	86	
家政上の技術の取得	22	55	2	4	4	3	8	1	8	1	108	
職業・資格取得・仕事一般	9	29	1	2	1	1	15	15	7	2	82	
学校の雰囲気・伝統	4	1	3			3	4	2	5		22	
自負・自信	4	6		1	1	1	7			20		
人格 価値 形成	考え方、行動の基礎	8	11	4	4	5	11	9	16	17	1	86
	女性・人間としての教育	20	13	4	1	1	2	11	3	12	1	68
教育	広い視野		21	15	3	10	5	14	11	17	6	3
	専門的な内容	17	29	6	3	1	4	17	15	5		97
	実学、実生活に役立つ	20	66	3	4	3	9	35	67	22	2	231
	科学的な視点	1	7	1		1		1	3	1		15
	人間の基礎、家政学の重要	19	13	3	8	1	5	27	10	17	2	105
その他	7		5	7		15	5			3	42	

を評価しているものが多い。そのほか「人格形成・価値観の確立」「家政上の技術の取得」「人との出会い」「職業や仕事、資格取得」も高く評価されている。

学科別にみると、「教育内容」では児童は、1) 広い視野を得た、3) 実学・実生活に役立つなどが、食物では、3) 実学、実生活に役だった、が圧倒的に多いが、2) 専門的な内容、学びたいことを学べた、ことを良かった点として評価しているものも多い。住居、被服、家政経済も、3) 実学、実生活に役だったと評価するものが一番多いが、さらに住居は、2) 専門的な内容、学びたいことを学べた、被服は、1) 広い視野をもてた、家政経済は、5) 人間の基礎・基盤が学べたと評価するものも多く、学科によりその傾向は若干異なっている。「教育内容」「人格形成・価値観の確立」以外では、児童、食物では「家政上の技術の取得」を評価するものも多いが、児童の場合は「人との出会い」を、食物では「職業や仕事、資格取得」を評価するものも多い。そのほか住居、被服では、「職業や仕事、資格取得」を、家政経済では「人との出会い」を評価するものが多くなっている。なお理Ⅰ、理Ⅱなどの理学系の卒業生による、家政学部の教育の良さに対する評価は少ない。

一方家政学部の教育を受けての問題点については、大きく6つの問題点に集約される。すなわち「家政学部の社会的認知が薄い」(花嫁修業的なイメージが強く、家政学部の社会的評価が低いことや家政学としての学問的位置づけが明確でない)、「幅広い分野を学ぶことができたが、専門性に欠けると感じた」(中途半端、専門分野を掘り下げて学べない、専門の基礎的学問の力の弱さを感じた)、「グローバル・ダイナミックな視点の欠如」(生活の面に偏りすぎていたため視野が狭い、狭い学問である)、「他学部、他大学との交流がなかった」(閉鎖的)、「家政学部の名称および家政学士に抵抗があった」「各分野の専門に走り、学部としての総合性に欠ける」(系統的なカリキュラムの必要性を感じる)などである。なおこれらの問題点は、学科に共通してあげられた問題点であるが、中でも「家政学部の名称、家政学士に抵抗があった」あるいは「工作上、デメリットを感じた」と言う問題点については、理Ⅰ物理、数学、化学、理Ⅱ、住居、家政経済などの学科の卒業生があげていると言うのが特徴的である。

(4) 卒業時の家政学部像

卒業時の家政学部像としては、卒業直後の進路により分析する。

全体的に「職業について」とするものが圧倒的に多い(80.8%)。次に多いのが「さらに勉学を続けた」(7.1%)と「結婚した」(6.9%)とするものであるが、両者合わせても15%に満たない。この傾向は学科による差はないが、理Ⅱ(10.6%)、被服(8.4%)、住居・児童(8.0%)、食物(7.7%)に「さらに勉学を続けた」とするものが、また「結婚した」とするものが児童(10.8%)、食物(9.3%)、被服(7.6%)にやや多くなっているのが目立つ。したがって「職業について」とするものは、理Ⅰ数学、化学、物理、家政経済、住居に多いのに対し(85%以上)、被服、理Ⅱ、食物、児童(74%以上)が少なくなっている。特に児童の場合、「稽古ごとなどの修業をした」とするものも5.2%いるため、「職業について」とするものの率が一番低くなっている。

卒業直後、職業についてのものその業種と職種の全体的傾向を見ると、まず業種としては「教育」が一番多く(23.8%)、次に「製造」(17.1%)「建設」(10.5%)と続いている。職種としては「事務・秘書」(23.9%)が一番多く、続いて「教員」(21.2%)「研究」(13.9%)となり、これら教育と研究で1/3を占めている。

なお業種、職種ともに、学科によりその傾向は異なっている。すなわち業種については、児童

では「教育」(58.9%)に、住居は「建設」(62.0%)に就くものが非常に多いのに対し、食物は「製造」(25.4%)と「教育」(22.3%)がほぼ半分を占めている。理Ⅰ物理、数学では、その割合はやや異なるが「製造」「教育」「情報処理」の3業種に就くものが多いのに対し(それぞれ2割以上)、理Ⅰ化学は、数学、物理と同様の傾向にあるが、「調査・研究」(21.3%)に就くものが多いのが異なっている点である。理Ⅱは「教育」(23.4%)「研究・調査」(19.8%)に就くものが多い。被服も「教育」(25.5%)が一番多いが、「製造」(20.8%)「卸・小売」(13.4%)に就くものも多い。家政経済は「金融」(22.3%)に就くものが多いなど、それぞれ専門と関連のある業種に就いていると言える。一方職種については、児童は「教員」(54.0%)、理Ⅰ化学・理Ⅱは「研究」(50.6%)、住居は「設計」(58.3%)、理Ⅰ物理、数学は「システムエンジニアリング(SE)」(38.2%, 45.3%)、家政経済は「事務・秘書」(51.9%)が多くなっているのに対し、被服は「事務・秘書」(29.4%)と「教員」(24.8%)が、食物は「事務・秘書」(26.8%)と「研究」(20.0%)のほかに「栄養士」(17.9%)などの職に就くものも多く、その傾向は学科により異なっている。

したがって卒業直後に職に就いたものは、家政学部、特に学科で学んだことを少しでも生かせる業種、職種に就いていると言えよう。

(5) 卒業後の家政学部像

卒業後の家政学部像としては、家政学部で学んだことが、卒業後の日常生活、職業、社会的な活動など、これまでの生活にどの程度生かされているかと言う観点からとらえる。

まず全体的には、日常生活に「生かされている」とするものが76.1%、職業に「生かされている」とするものは66.8%、社会的な活動に「生かされている」とするものは42.2%となり、その割合は日常生活、職業、社会的な活動の順に減少している。つまり日常生活にはかなり生かされているが、職業や社会的な活動にはあまり生かされていないと言える。と言うのは「生かされていない」とするものが、職業、社会的な活動に対し、それぞれ17.0%いるからである。

これを学科別にみると、まず日常生活への影響としては、ほとんどの学科で「生かされている」とするものが多い。なかでも食物の場合9割強のものが、被服では8割強のものが生かされているとしているが、児童、社会福祉、住居、家政経済、理Ⅱ、理Ⅰ化学の順に生かされているとするものの割合は減少し、最も少ないのが理Ⅰ物理である。なお「生かされている」とするものの、次に多いのが「どちらともいえない」とするものであるが、特に理Ⅰ物理の場合、「生かされていない」とするものが多いが目立つ(23.8%)。

一方職業への影響としては、同様に「生かされている」とするものが一番多いが、なかでも一番「生かされている」とするものが多いのが住居である。そのほか児童、食物、理Ⅰ数学では約7割、理Ⅰ化学、被服では6割強のものが、理Ⅰ物理、理Ⅱ、家政経済では約半数となっている。なお住居を除くすべての学科で1割ないし2割のものが、職業に「生かされていない」としているが、特に家政経済、被服、理Ⅱに多いが目立つ。

さらに社会的な活動については、「生かされている」とするものの割合は減少し、「どちらともいえない」とするものが多くなっている。「生かされている」とするものの方が「どちらともいえない」とするものより多いのは、児童、食物、社会福祉、家政経済であり、中でも児童、食物に「生かされている」とするものが多い。これに対し「どちらともいえない」とするものの割合の方が多いのは、理Ⅰ物理、数学、化学、理Ⅱ、住居である。被服のみ「生かされている」とするものと「どちらともいえない」とするものの割合がほぼ同じであるなど、学科により3つのグ

ループに分けられる。なお社会的な活動に「生かされていない」とするものの割合が、日常生活、職業に比べ多くなっているのが特徴的である。特に「生かされていない」とするものが最も多いのが理Ⅰ物理（32.8%）であり、最も少ないのが児童（10.3%）である（社会福祉を除く）。

以上のことから日常生活、職業、社会的な活動への影響として、目立った大きな差異は見られないが、学科により若干異なった傾向にあると言える。

これらの生かされているとする理由については、全体として、まず日常生活では、「良い友人を得ることができた」（48.5%）、「広い視野で考えることができた」（46.3%）、「専門知識や技能が身についた」（43.9%）などの理由を約半数のものがあげている。この3つの理由をあげるものが多いのが被服である。特に「良い友人を得ることができた」と「広い視野で考えることができた」というこの2つの理由は、食物を除くすべての学科で、多くのものがあげているが、理Ⅰ数学、化学に多い。この2つの理由のほかに「自分の価値観を形成できた」または「専門的知識や技能が身についた」という理由をあげるものも多く、前者に該当するのが理Ⅰ物理、児童、理Ⅱ、住居、家政経済であり、後者に該当するのが被服である。なお「良い友人を得ることができた」とする理由をあげるもの以上に、「専門的知識や技能が身についた」とする理由をあげたものが圧倒的に多いのが食物である（74.6%）。

次に職業に生かされている理由としては、どの学科も「専門知識や技能が身についた」をあげるものが圧倒的に多く、次に多いのが「広い視野で考えることができるようになった」であるが、その割合は前者の理由をあげるものの約半分にすぎない。そのほか「社会的に評価の高い大学をでた」を理由とするものも、各学科とも2割～3割いる。なお学科による違いはほとんどないが、しいて言えば家政経済に「広い視野で考えることができるようになった」とするものが（53.3%）、住居、食物、家政経済に「良い教員と出会うことができた」（23.7%～28.0%）とするものが、理Ⅰ数学に「人とのつきあい方が身についた」（22.1%）とするものが、被服に「所属学科以外の知識が身についた」（24.8%）とするものが、やや多くいると言える。

社会的な活動に生かされている理由では、「広い視野で考えることができるようになった」を6割弱のものがあげている。次に多いのが「自分の価値観を形成できた」（27.8%～39.1%）、「人とのつきあい方が身についた」（25.8%～41.7%）であり、これら3つの理由をあげるものが多いというのが、ほとんどの学科（理Ⅰ物理、社会福祉を除く）での共通点となっている。さらにこれらの理由のほかに、住居、被服では「よい友人を得ることができた」（26.7%、30.0%）、児童、食物では「専門知識や技能が身についた」（27.3%、28.1%）をあげるものが、それぞれ多くなっているのが目立つ。理Ⅰ物理は「広い視野で考えることができるようになった」（50.0%）、「自分の価値観を形成できた」（31.3%）、「良い友人を得ることができた」（31.3%）のほかに、「生きていく上で精神的な支えを得た」（25.0%）と言う理由をあげるものが多く、ほかの学科とやや異なった傾向にある。

以上のことから、日常生活については学科によりその理由の傾向はやや異なるが、職業、社会的な活動については、学科による大きな差異はないと言える。

なお社会活動を経験したことがあるとするものが64.5%いるが、その社会活動にあたって家政学部で学んだことが生かされているかについては、地域団体（例えば公立高校のPTA、地域の婦人会、子供会など）に携わったものの約半数のものが、また有志団体（例えば大学婦人協会、YWCAなど）や社会福祉団体（例えば更正保護婦人協会、点訳、介護など）などに携わったものは、地域団体よりも少ないが、両者ともに生かされているとするものが多い。

したがって家政学部で学んだことは、これまでの生活（日常生活、職業、社会的な活動）にある程度生かされているととらえられる。

最後に、家政学部の教育が、自分の全人的な発達に影響しているかどうかについては、「影響している」とするものが67.1%となり一番多いが、「どちらともいえない」とするものも29.0%いる。学科別では食物に最も多く（79.8%）、次に社会福祉→児童→家政経済→被服→住居（65.1%）と続き、影響しているとするものの割合は8割から6.5割に減少している。特に現在、理学部である理Ⅰ、理Ⅱの学科の場合、理Ⅱに「影響している」（60.6%）とするものが最も多いが、理Ⅰでは化学、数学と減少し、この「影響している」とするものの割合は、中でも物理に最も少なく（38.6%）、「どちらでもない」とするものが多い。なお「影響していない」とするものが一番多いのが理Ⅰ物理である（14.0%）。したがって理系出身者の人的発達にとっては、家政学部の教育はあまり効力を発揮していないと受けとられていると言える

なお全人的な発達への影響についての自由意見をまとめたのが表Ⅲ-5である。表より「人との出会い」が一番多く、次に「人格形成への影響（女性の自立を含む）」「学校の伝統や雰囲気」「教育」「成瀬先生の教育理念」などが、続いてあげられており、大学、学寮、家政学部で学んだことが、多くの卒業生の全人的発達に大きな影響を与えていることを、確認することができた。

表Ⅲ-5 全人的発達への影響としての意見（一部のみ掲載）（件）

人との出会い (170)	すばらしい教授、友人に恵まれた。 先輩の教授の活躍している姿に、影響を受けた。 先生方の志や態度、友人たちのものの考え方や生き方など 4年間女子大学で学んだ学問、培った人間関係は、私の人生にとって大きな宝物である。
学校の伝統や 雰囲気 (143) 学生生活	寮生活で得た経験、友人が影響している。 他人に対する思いやり、協調性が身についた。 女子大の校風は、生活での基本的な姿勢となっている。
人格形成 (153)	女性のスペシャリストの家政学部はやりがいがあり、自分の存在を確かめることができた。 女性として一人の人間として自立し自分の考え、展望をもつことができるようになった。 女性の自立の大切さを学んだ。
教育 (91)	人間としての生き方の基本を学んだ。 知識は浅いが、広く物事を見られるようになった。 家政学を科学的に学ぶことができた。 基礎を学んでいるので、深く理解できる。
教育理念 (78)	日本女子大の教育理念に影響を受けた。 本学の建学の精神が、日常生活の支えとなっている。 創立者の教育理念が、知らず知らずのうちに身についた。
職業 (43)	先生方の自分の専門の学問を愛している姿を思い出すたびに自分の職業にたいする態度を反省させられる。 好きな分野を勉強し、それを生かした職業にも就けた。 今の職業を選択する基盤となった。
家政上の技術 (37)	子育ての上で。生活の基盤のところ。主婦になったとき少なからず役立っている。 食生活、住居に学んだことが生かされている。
自信 (33)	仕事に就いてから、家庭生活についてから、自信を持って行動ができるのは、大学時代の教えに基づいている。 本学で学んだことにより、自分に自信がついた。 自分に自信をもつことができ、広い視野で物事に対処するようになった。

新制大学以降の家政学部卒業生に対するアンケート調査より、卒業生からみた家政学部像を明らかにすることを試みた。その結果、入学前の家政学部像としては、自分の適性にあった学科(学部)を選択し、専門性の高い教育が受けられることを期待している。実際家政学部で学んだことに対しては、家政学部の教育、特に家政学部の教育の特徴である家政学部共通専門科目を学んだことを評価し、しかも家政学部で受けた教育を生かすべく、卒業後は多くのものが就職している。卒業後の生活においては、日常生活の面で家政学部で学んだことが生かされているとするものが多いが、職業、社会的な活動に生かされているとするものは少ない。特に前述した家政学部共通専門科目については、学生時代にはその意義があまり感じられなかったが、卒業後職場や家庭生活に入って、その意義を理解したとするものもおり、家政学部の教育が卒業後に浸透、理解されるようになると言える。

なお家政学部の方向・あり方についての自由記述による意見(1,012件)より、卒業生のイメージしている家政学部像をまとめると以下ようになる。すなわち「人間が生きていくための術、あるいは人間生活という視点から追究するのが家政学であり、生活を支える基本、社会の中で生きることを考える場が家政学部である」ととらえている。そのほか「家政学=女性だけの学問ではない」「家政学は、これからは男女ともに、あるいは男性にとって学ぶ必要のある学問である」と言う意見もあげられている。その家政学部への希望としては、「伝統にしばられず、時代にあった学問を行うことにより、社会人として精神的に強い人間を育て、新しい文化を生みだしてほしい」「人間、社会人、家庭人として自立できる人間の育成、また社会に役立ち、かつ時代に即した、専門性のある教育を」などという要求がなされている。

したがって家政学部の教育を受けた卒業生の態度、意見から、日本女子大の教育理念である「人としての教育」の柱としての家政学部構想が、着実に浸透していることが裏付けられた。

3) 通信教育課程卒業生に対する調査から

(1) 調査対象者の概要

対象者の入学前の出身校は「短期大学」と「全日制高校」が多く、両方で約70%を占めるが、旧い回生では「旧制女学校」「旧制女子専門学校」「師範学校」などの旧制度の学校出身者もみられ多様である。出身校とも関連して入学形態では、「1年次入学」と「編入学」で90%以上を占め、「学士入学」は少ない。入学時の年齢も、「19歳以下」から「50歳以上」まで幅広く、「20から24歳」の年齢層が最も多く、24歳以下の入学者が全体の半数を、その一方で30歳以上が約1/4を占める。通信教育課程(以下「通信」)の場合、もともと出身校や取得単位数により修業年限は2年から4年と幅があるが、実際の在学期間では「4年から5年」が最も多く、「6年から7年」と続くが、10年以上の在学も10%以上を占め、各学生の事情により差は大きい。

入学時に職業を持つ者は全体の約80%で、食物学科の有職率が最も高いが、全体的に近年は減少傾向にある。その職種は「教員」が最も多く、「事務・秘書」「栄養士」と続くが、「教員」は減少傾向にある。学科別では生活芸術学科に「教員」が、児童学科に「事務・秘書」が、食物学科に「栄養士」が3学科中最も多い。入学時の職業を在学中も継続した者は80%以上を占めるが、その一方で10%の者が転職し、8%の者が退職している。

なお現在の生活については、対象者の80%以上が既婚者で、その子どもは2人が最も多い。また家族の人数は2人が最も多く、次いで4人である。

(2) 入学前の家政学部像

では対象者は入学前にどのような家政学部像を抱いていたのか、学科選択の動機から探っていくが、その前に「通信」を選択した理由を検討する。「通信」の選択理由としては「職業と両立できる」が最も多く、以下「家庭の事情に応じて学べる」「仕事の事情に応じて学べる」「生涯学習として学べる」の順である。入学者が多様で有職者も多いことから、職業や家庭との両立が重視されているが、その一方で生涯学習のために入学する者も増加傾向にある。学科別では「職業と両立できる」は食物学科に最も多く、「家庭の事情に応じて学べる」が児童学科に、「生涯学習として学べる」は生活芸術学科にやや多い。

「通信」は児童・食物・生活芸術の3学科から構成されるが、学科を選択した動機（複数選択）では、「専門の勉強がしたかった」が最も多く、次いで「資格、免許を取りたいと思って」が続く。専門や資格・免許という職業につながる動機が共に50%以上と他を大きく上回っている。他には「自分の適性に合っている」「社会的視野を広げる」「将来社会の役に立ちたい」「女性としての将来に役立ちそう」などの動機が続いている。学科別では食物学科に「専門の勉強」が、生活芸術学科で「資格、免許」が多くなっている。

以上のような結果から、職業や家庭との両立や生涯学習などを目指す「通信」入学者では家政学部の各学科に対して専門性や免許（教員）取得を期待する者が多いが、その一方で社会的視野を広げ、社会に役立つこと、女性の生活に役立てることも期待している。つまり家政学部は専門を身につけ免許が取得できる学部であり、同時に幅広い教養と女性の将来生活に関わる内容が学べる学部と捉えられている。

(3) 大学在学時の家政学部像

では「通信」の教育はどのように受けとめられているのか、家政学部の「共通専門科目の履修」および「学んでよかった点」「問題点」の自由記述から探り、大学在学時の家政学部像を検討する。

「通信」でも家政学部の共通専門科目を履修するが、全体の90%以上の者がそれを肯定的に評価している。評価の具体的内容としては「教養が身についた、視野が広がった」が最も多く、次いで「学んでよかった」で、以下「当然だと思って履修した」「家政学の基礎、全体を学んだ」「自分の専門以外の学習ができた」の順である。多くの者が家政学を広く学び、教養が身についたと評価している。

「通信」で「学んでよかった点」では「スクーリング」に関するものが最も多く、次いで通信の「教育」に関するもの、通信独自の「学習形態」に関するものが多く、以下「職業・資格取得」「卒業できたこと・その自信」「人間形成・価値観」「学ぶ喜び・生涯学習」「校風・教育理念」の順である。特にスクーリングにおける「友人・仲間」との交流や「教員」との出会いをあげる者が多い。職業や家庭と両立しながら通常は自宅で学ぶ学生たちにとって、多くの仲間と出会い、直接教員の講義を受講でき、実験や実習を体験できる夏期スクーリングが大学生活に刺激を与え、学習継続の大きな支えとなっている。学習形態については「自分のペースで学べる」ことが最も評価されている。教育面では「専門教育」をあげる者が最も多いが、同時に「教養・広い視野」を評価する者も多くみられる。

一方「問題点」ではよかった点同様に「スクーリング」に関するものが最も多く、次いで「教育」に関するもの、「学習継続」に関するものが多く、以下「職業・資格取得」「通信に対する偏見」「友人との交流」「教員とのふれあい」の順である。こうしてみると「通信」の利点は同時に

問題点にもなっている。つまり大学生活に刺激を与え、学習継続の支えになるはずのスクーリングへの「参加が困難」であること、学習継続に関して「自分のペースで学べるが、意志を強く持たないと誰も促してくれないので挫折しやすい」といった「独学の困難」や「職業との両立」の困難さが問題点として指摘されている。教育面でも「試験・レポート」や「質問・指導」への対応に不満があり、「学力不足、学習が深まらない」ことも問題とされている。

以上のように、「通信」の教育に対して、共通専門科目の履修を通して家政学を広く学び教養が身についたと評価する者が多く、教育の専門性や資格取得、同時に教養や広い視野、人間形成面でも評価する者が多い。これは入学前の家政学部像に共通する。しかしその一方で、職業や家庭と両立できるから選択された「通信」という独特の教育・学習形態においても学習継続の困難、免許のための教育実習参加が困難、さらには学力不足などの問題が生じている。

(4) 卒業時の家政学部像

卒業時の家政学部像について、卒業直後の進路から探ってみる。卒業直後には「それまでの職業を継続した」が最も多く、次いで「新たに職業について」で、職業生活を選択した者が70%以上を占めているが、入学時の有職率よりは減少している。以下、「さらに勉学を続けた」「結婚した」の順であるが、勉学を続ける者は増加傾向にある。新たに就いた職種では、「教員」がずば抜けて多く、「事務・秘書」「栄養士」「福祉指導」が続いている。このように卒業直後には職業生活を選択する者が多く、後述するように「通信」の教育が職業に生かされたものと思われる。在学中の職業を継続する者は減少傾向にあるが、対象者に入学時から教員が多いこともあり、卒業直後も教員を継続する者、新たに教員になる者が多く、その面では専門・資格を生かした進路となっている。つまり卒業時においても専門・資格を生かした家政学部像がみられる。しかし近年は入学者における教員の比率が低下しており、また教員採用状況の厳しさを反映してか資格取得者も、教員になる者も減少傾向にあり、進路の多様化傾向がみられる。

(5) 卒業後の家政学部像

卒業後の家政学部像について、「通信」における学習の卒業後の生活、すなわち「日常生活」「職業」「社会的な活動」への影響と全人的な発達への影響から検討する。

まず「日常生活」に「生かされている」とする者が90%と圧倒的多数を占める。その理由として「広い視野で考えることができる」「生きていく上で精神的な支えを得た」が共に多く、以下「よい友人を得ることができた」「専門的知識や技能が身についた」「自分の価値観を形成できた」の順である。また「職業」の面でも「生かされている」者が80%と多数を占め、理由として「専門的知識や技能が身についた」がずば抜けて多く、次いで「広い視野で考えることができる」で、以下「所属学科以外の知識が身についた」「よい教員と出会うことができた」の順である。最後に「社会的な活動」では「生かされている」者は65%と日常生活や職業の場合に比べると低くなっているが、生かされている理由としては「広い視野で考えることができる」が最も多く、以下「自分の価値観を形成できた」「リーダーシップが身についた」「生きていく上で精神的な支えを得た」「専門的知識や技能が身についた」の順である。

このように80%以上の卒業生では、「通信」での教育が家庭生活および職業に生かされ、65%の卒業生で社会的な活動に生かされている。

次に「通信」の教育の全人的な発達への影響についてであるが、全人的な発達に「影響している」と答えた者が84.4%を占め、「どちらともいえない」が14.4%で、「影響していない」は1.2%とごくわずかである。「影響している」主な理由としては「卒業したことが自信・誇りにな

った」が最も多く、次いで「人間形成、生き方」「学習意欲・習慣、生涯学習」「最後までやり遂げる意志、努力」が多く、以下「広い視野、価値観、ものの見方」「創立者の教育理念、三代綱領」「友人・先輩との交流」の順である。これらの理由には「通信」独特の教育や学習形態に関わるものが多くみられるが、同時に広い視野や価値観、生き方などもあげられている。その一方で創立者の教育理念や三代綱領なども全人的な発達に影響している。

以上のように、卒業後の家政学部像は職業や日常生活、さらには全人的発達に生かされるものとして捉えられているが、具体的には専門的知識や技能とともに、広い視野や学科の枠をこえた幅広い知識の習得、価値観の形成や精神的な支え、リーダーシップ育成などが含まれている。

本調査にみられる「通信」卒業生では入学前、大学在学時、大学卒業時、卒業後と一貫して専門的知識や資格という職業・専門と関わる学部像と、その一方で教養や広い視野、価値観、人間形成といった本学の伝統的な教育の流れがみられる。

4) 家政学研究科修了生に対する調査から

(1) 調査対象者の概要

調査の対象となった修了生は、大学卒業後すぐに進学した場合には、1回生は62歳、38回生は25歳である。したがってかなり年齢の幅が広いが、実際に修了時の年齢をみると、最も多いのが24～25歳で、全体の65.4%であり、26～29歳、16.1%、30～39歳、11.3%、40歳以上、4.1%である。したがって、大学院の場合には、全体の三分の一は、大学卒業後すぐに進学した学生より年齢の高い学生が在籍していることになり、実際には62歳以上の修了生がいることになる。また、出身大学では、本学が69.0%を占めている。さらに、全体の70.2%が既婚者であり、子どもの数は、なし(19.3%)、1人(27.6%)、2人(39.1%)、3人以上(14.0%)である。

(2) 入学前の家政学研究科像

入学前の状況は、全体の71.3%が大学卒業後すぐに大学院に進学しているが、専攻別にみると、被服(以下、専攻を省略)が最も割合が高く(84.4%)、次いで食物・栄養(75.0%)であり、生活経済は最も低く(46.2%)になっている。生活経済は、開設されてから年数が浅く、いったん社会に出てから現職のまま大学院に進学した者が多いことがわかる。

また住居では就職後退職して進学した者が29.2%になっていることは、専攻の特徴を表しているといえる。食物・栄養でも19.5%であり、同様の傾向がみられる。

大学院への進学動機としては「専門的な研究がしたかった」が454名、全体の89.7%である。次に多い動機は、「指導を受けたい先生がいた」であり、197名で38.9%となっている。

しかし、「日本女子大学の大学院に進みたい」では、最も多い児童が23.6%であるが、最も少ない被服でも13.3%の回答があった。「大学の指導教員に勧められて」という回答も同じような割合を示している。「資格・免許を取りたい」、「家族に勧められて」、「家政学的な視点を学びたかった」という動機も全体としてそれぞれ約8%みられる。

学費(複数回答)については508名中394名が「親族の援助」によっているが、これは77.9%にあたる。「日本育英会奨学金」の占める割合が全体で31.6%、多い児童では38.7%、少ない被服では22.2%となっている。「その他の奨学金」を合わせると、一番多い住居では59.1%になっている。「自己資金」の割合は全体で25.3%であるが、現職のまま進学した者が多い生活経済では、61.5%にもなっている。

(3) 修了時の家政学研究科像

修了後の状況では、全体の68.1%がすぐに就職している。その割合が一番高いのは被服(84.4%)であるが、食物・栄養と住居では同じ割合(71.1%)を示している。しかし、博士課程に進学した割合が一番高いのは住居である(17.8%)。実数は少ないが、生活経済でも博士課程への進学者は多くなっている。一方、児童では、すぐに就職した者は56.6%であった。修了後就職した者と、入学前からの仕事を続けた者について、その業種・職種・勤務形態について尋ねた。

業種では、全体として教育が最も多く(50.4%)、次いで調査・研究(16.3%)、医療・福祉(9.1%)、建設(7.2%)、製造(5.8%)である。専攻別では、教育の割合は被服が最も高く(73.7%)、ついで、児童(53.0%)、食物・栄養(56.4%)であるが、住居は18.8%である。また、医療・福祉関係では、児童(31.8%)、食物・栄養(6.4%)のみである。

住居で最も多いのは建設関係(40.6%)であり、調査・研究(21.9%)がそれに次いでいる。調査・研究は食物・栄養でも19.1%を占めている。また製造は、食物・栄養(8.5%)と被服(7.9%)にみられるが、他の専攻にはほとんどない。

職種では、教員が最も多く、全体で40.5%、次いで、研究(31.2%)、SE(5.2%)、設計(4.9%)となっている。これを専攻別にみると、児童では、教員(40.9%)、研究(15.2%)、福祉指導(6.1%)、事務・秘書(4.5%)となっている。食物・栄養では教員(45.3%)、研究(41.1%)であり、この2職種で96.4%を占め、圧倒的に多くなっている。住居では、研究(31.3%)、設計(28.1%)、教員(15.6%)、事務・秘書(9.4%)である。被服では、教員(60.0%)、研究(12.5%)、事務・秘書(10.0%)である。

勤務形態は、全体としてフルタイムの勤務が69.9%であるが、専攻によつての違いが大きい。たとえば児童ではフルタイム47.0%に対して非常勤・臨時勤務は39.4%であり、住居では93.9%がフルタイムである。また、食物・栄養では72.3%、被服は55.0%である。次に、非常勤・臨時の勤務者は、前に挙げた児童の39.4%、被服の32.5%、食物・栄養の19.1%であった。

就職をした者の転職経験は、全体で44.0%があると答えている。専攻別では、児童(60.3%)、住居(59.4%)が多く、食物・栄養(37.1%)、被服(28.9%)がそれについている。

現在就職していない者127名の再就職の希望については、希望するものは73名(57.5%)であった。専攻別では、児童19名(希望なし7名)、食物・栄養26名(40名)、住居16名(4名)、被服9名(2名)、生活経済3名(1名)となっている。なお、希望業種は教育が多く、全体の60.9%を占め、それについて調査・研究18.8%、医療・福祉7.8%の順であった。

社会活動の経験については、全体では「現在活動している」(50.2%)、「過去に活動した経験がある」(20.9%)、「今後活動してみたい」(12.8%)であり、合計すると83.9%が社会活動に積極的である。割合が高いのは児童(66.0%)、低いのは住居(40.0%)、生活経済(38.5%)であった。

次に、「社会活動を現在している」、「過去にしていた」361名の修了生に対して、その種類を尋ねた。複数回答であるので、多い順に、地域団体(165名)、研究団体(158名)、職域団体(71名)、趣味サークル(68名)、同窓会(67名)、有志団体(66名)、学習サークル(53名)となっている。この傾向は各専攻においてもほぼ同じであった。

公職の経験については、「現在ついている」という回答が全体で13.0%であり、かなり少ない。専攻別では、住居17.5%、児童17.0%、食物・栄養11.8%となっていた。

(4) 修了後の家政学研究科像

日常生活への影響としては、全体で「生かされている」(76.4%)、「どちらともいえない」(19.7%)となっている。専攻別では、「生かされている」の割合が、食物・栄養(81.3%)、児童(79.8%)、生活経済(69.2%)、住居(68.9%)、被服(57.8%)である。日常生活に生かされている理由(複数回答)では、最も多いものが「広い視野で考えることができる」であり、388名中215名が回答している。順に、「自分の価値観を形成できた」(192名)、「専門的な知識や技能が身についた」(146名)、「精神的な支えを得た」(132名)、「よい友人を得ることができた」(131名)、「よい教員と出会うことができた」(90名)となっている。

次に職業への影響については、全体で85.6%が「生かされている」と答え、「どちらともいえない」(8.4%)、「生かされていない」(6.0%)となっている。日常生活の場合よりも影響が大きいことは明らかである。また、専攻別にみると、食物・栄養(90.1%)、児童(85.4%)、生活経済(81.8%)、住居(79.1%)、被服(75.6%)となっている。その生かされている理由(複数回答)は407名中、多い順に、「専門的な知識や技能」(355名)、「よい教員」(188名)、「広い視野」(163名)、「自分の価値観」(94名)、「社会的に評価の高い大学院を出た」(65名)となっている。また、「よい教員」は46.2%、「広い視野」は40.0%にあたり、これらは本大学院の特徴のひとつであると思われる。

さらに社会的な活動への影響については、全体で57.6%が「生かされている」と答え、31.5%が「どちらともいえない」、10.9%が「生かされていない」と答えている。専攻別では、「生かされている」の多い順に、児童(73.5%)、生活経済(70.0%)、住居(67.4%)、食物・栄養(50.0%)、被服(38.1%)となっている。その生かされている理由(複数回答)では、261名中、「広い視野」(131名)、「専門的な知識や技能」(115名)、「自分の価値観」(105名)、「よい友人」(62名)、「よい教員」(57名)、「精神的な支え」(46名)、「人との付き合い方が身についた」(43名)となっている。

家政学研究科の修了生は、専攻毎の特徴がはっきりしており、それぞれの専攻を生かした職業に就いている修了生が多いことがわかった。また、既婚者で子どものいる割合が多く、職業を持っていても社会的な活動も行い、再教育についての意識も高いのである。

また「広い視野で考えることができる」、「自分の価値観を形成できた」とする修了生が多いことは、本学の建学の精神である全人的な教育の一端が浮かび上がってくるのではないだろうか。

以上1897年に示された家政学部構想が、1901年に具体化され日本女子大学校家政学部が誕生した。それ以来100年間の時代の流れにともなって家政学部構想がどのように変化し、また実現されてきたのであろうか。この課題を解明する一部として、これまでも種々の調査がおこなわれてきたが、本稿では新制による家政学部の学部、通信教育課程の卒業生および家政学研究科修了生を対象に調査、分析を試みた。

その結果旧制、新制ともにそれぞれ受けた教育の内容、教育期間、卒業後たどってきた環境などはかなり異なっているが、人間としての女性を前提としたリベラルアーツの家政学部教育理念は、着実に浸透していると言える。

(学部、通信教育課程、家政学研究科別に分析した結果を、本学発行の家政学部紀要(2002)第49号⁶⁾に報告した)

Ⅲにおける注・引用文献

- (1) 日本女子大学女子教育研究所編：大正の生涯教育 女子教育研究双書5, 国土社, 1975.
- (2) 日本女子大学女子教育研究所編：昭和前期の女子教育 女子教育研究双書7, 国土社, 1984.
- (3) 日本女子大学女子教育研究所編：女子の生涯教育 女子教育研究双書3, 国土社, 1968.
- (4) 日本女子大学女子教育研究所編：日本女子大学通信教育課程卒業生に関する調査, 1991年
- (5) 通信教育創設50周年記念事業委員会：「日本女子大学通信教育の50年」日本女子大学通信教育課程, 1999年

- (6) 日本女子大学学紀要 家政学部 第49号 (2002) pp.1～30

日本女子大学の卒業生実態調査

—第1報	家政学部卒業生の場合—	住居学科	沖田富美子	他3名
—第2報	通信教育課程卒業生の場合—	教育学科	真橋美智子	他3名
—第3報	家政学研究科修士の場合—	被服学科	佐々井 啓	他3名

日本女子大学総合研究所紀要 第5号

2002(平成14)年11月1日 発行

発行人 本間道子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03(3943)3131(代表)

03(5981)3277(直通・FAX)
